

42183

教科書文庫

4
810
42-1923
200030 2423

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

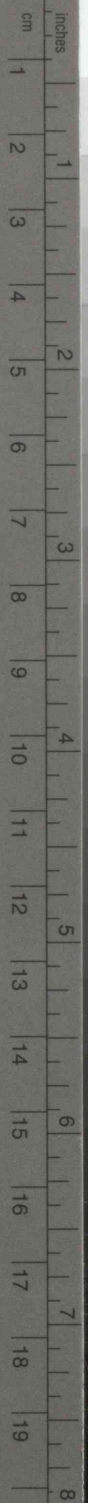


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

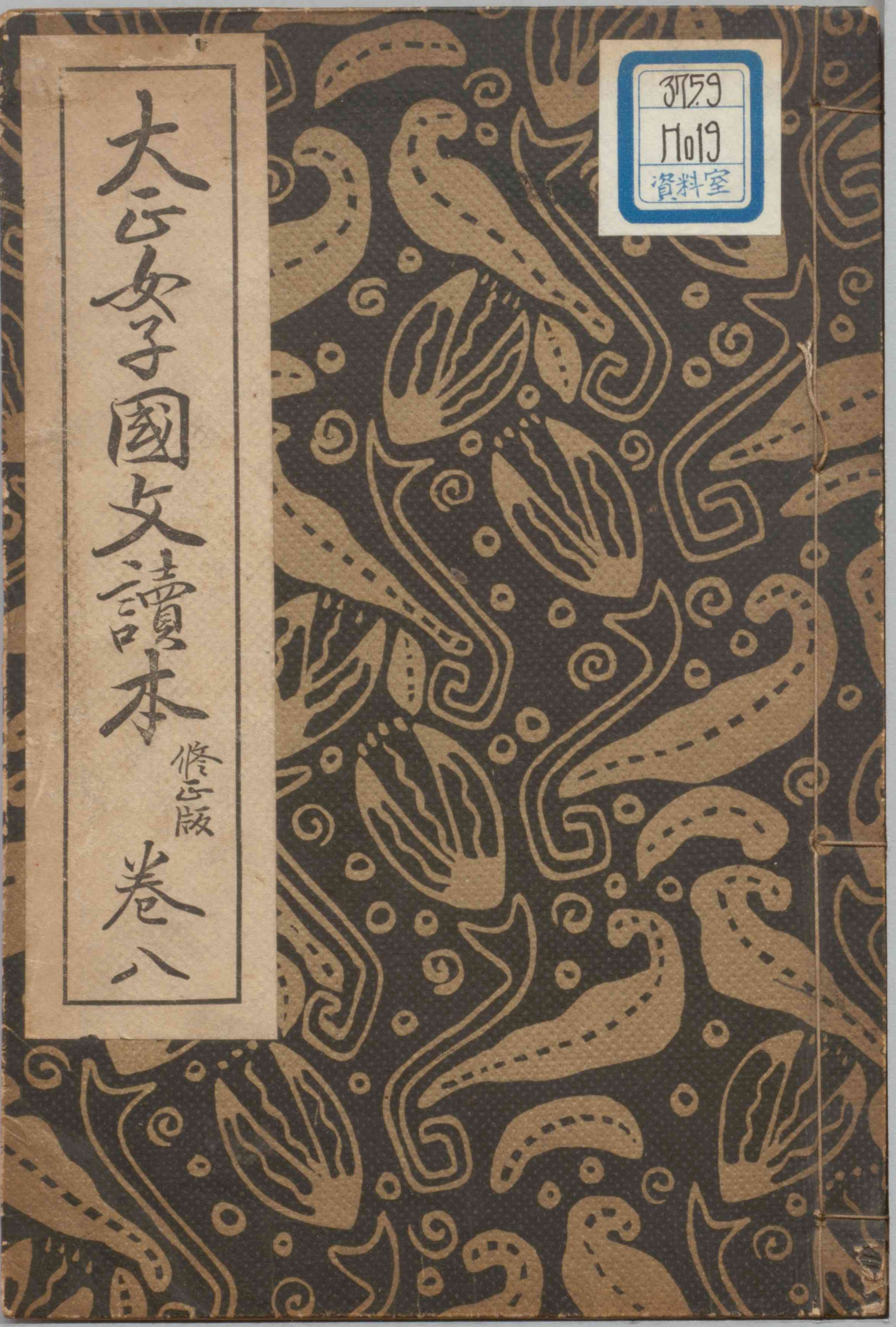
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3159
No19
資料室

大正女子國文讀本
修正版
卷八



3769
H019

資料室

大正十二年二月一日
教育部檢定
高等女子學校國語教科用科

保科考一編

大正女子國文讀本

東京 會社育英書院



大正女子國文讀本 修正版 卷八

目次

一	我が國民の特性	藤岡作太郎	一
二	初瀬の夕	徳富蘆花	六
三	長谷寺詣	幸田露伴	二
四	良寛の遺蹟	相馬御風	六
五	いさよふ月	阿佛尼	五
六	野村望東尼	佐々政一	三
七	紅葉の山	(平家物語)	六
八	碓氷より	徳富蘆花	三

目次

九 秋窓雜記……………北村透谷……………四

一〇 百蟲譜……………横井也有……………五

一一 秋のあはれ……………樋口一葉……………五

一 秋の夜……………樋口一葉……………五

二 雁がね……………清水濱臣……………六

三 砧の音……………清水濱臣……………六

一二 徒然草抄……………三

一 堀地の僧正……………三

二 入り立たぬ様……………三

三 二つの矢……………三

四 高名の木のぼり……………六

五 鬼神は邪なし……………六

一三 詩二篇……………與謝野晶子……………六

一 わが髪……………六

二 雪のたそがれ……………六

一四 船岡山……………(保元物語)……………七

一五 折々の月……………池邊義象……………七

一六 菅公……………高山林次郎……………八

一七 忘れ難き日……………姉崎嘲風……………八

一八 朋友選ぶべし……………(小訓抄)……………七

一九 新古今集の歌風……………藤岡作太郎……………一〇

二〇 千遍讀……………雨森芳洲……………一七

二一 ヴェニス of 法庭 その一……………坪内逍遙…二二

二二 ヴェニス of 法庭 その二…………………………二六

二三 ヴェニス of 法庭 その三…………………………二五

二四 曉の誕生……………島崎藤村…二三

二五 カルナバル祭……………菊地幽方…二五



大正女子國文讀本 修正版 卷八

一 我が國民の特性

慈愛なる母の懷に養はれたる子は、生涯其の恩愛を忘れず。日本の風土は國民の慈母なり。地味豊饒にして、河海に魚貝の利多く、生活をして自由ならしむるが上に、優美溫雅なる山川は、常に臉上に愛を湛ふるが如し。接する者は之に親しみ、親しむ者はこれを慕ふ。愛に迎へらるゝ者は、愛を酬いざるを得ず。天然の大公園に棲む我が國民が、一木一草をなつかしむは自然の情なるべし。都會の緣日に、露を帯びたる植木

一 我が國民の特性

一

讀本の版
突ぶ
(無きよに)

の葉の翠、花の紅、カンテラの光に映えて、みづ／＼しく鮮かなるを、中流以下の市民はあれこれと買求めて、座敷に飾り庭に植込む。裏長屋の道具の据所もなき窓前にも、稗蒔作りて田舎の景色の面影を偲び、破鉢に唐芋を育てて優しき野趣を樂しむ。長火鉢の脇の福壽草は鏡餅に對して暖かけに、軒端に吊りたる忍草は風鈴の音と共に涼し。上下貴賤を通じて自然を愛すること斯くの如きは、他の國民に其の匹ありや。我が國民は母の慈愛をのみ享けて、父の威嚴を知らず。自然の愛すべきを見て、畏るべきを思はず。野をも垣をも吹亂す二百十日の風も野分の名にやさしく、峯も谷も一つに埋みてすさまじき冬の山里も、深雪といへばみやびやかなり。「荒き

荒き猪云々

徒然草にある

句

兼好

鎌倉時代末から吉野朝にかけての文學者本姓卜部氏、京都吉田に住んだので吉田を氏とした。

源氏物語

紫式部の著した小説、五十四帖

猪も、ふすみの床と稱ふるにやさしく聞ゆ。など兼好がいへるは、我等が自然に對する此の傾向を説明せるなり。雨といへば、照りつゞきたる夏などは嬉しけれど、一日の降りも、十日の照りより飽き／＼するに、卯の花くだし時雨など、何れも趣ありて感ぜらる。

春雨

自然の愛は斯くして表はるゝのみならず、其の名を借りて屢人事に用ふ。文學には源氏物語の卷の名に、夕顔、末摘花、葵、柿、朝顔、胡蝶、螢、常夏、藤袴、若菜、柏木、鈴蟲、紅梅等あり。菓子に鶯餅、櫻餅、柏餅、萩の餅、紅梅、焼時雨など、枚擧するに遑あらず。今の刻煙草の名にも、福壽草、白梅、皐月、あやめ、萩、紅葉等あり。古く獸肉を紅葉といひ、金貨を山吹に譬へたるもやさしからずや。

我が國民は自然を愛賞する餘り、又よく之を尊重せり。尊重する者には悦んで服従す。彼等は漫りに人工の手を加へずして、自然の儘に自然を仰ぐ。此の服従を以て屈伏といふ勿れ。悦服は自動的なり、屈伏は他動的なり。屈伏するものは、不平なる奴隸が氣儘なる主人に對するが如く、悦服するものは従順なる兒孫が寛大なる家長を見るが如し。任意的なるものは、毫も抑壓の念を其の間に感ぜず、他の意を以て喜んで己の意とす。

花に對する我等の趣味が、如何に西洋人に異なるかを見よ。薔薇は枝ながら幹ながらの姿の麗しきにあらず、花一輪の色の艶に香の芳しきなり。櫻は一枝の趣を賞するよりも、峯に

渡り川に沿ひて、雲とたなびきたる態の目ざましきなり。花瓶に挿す時、西洋人は花ばかりをちぎりて手毬の如くし、日本人は葉も枝も其の儘に願はくは之に置く朝露をも落さざらんとす。一は枝を撓めて花輪を作り、花瓣を卓上に振撒きて歡を助くるに、一は床上の盆石盆栽に、自然の大景を方寸に寫す。彼は色彩の變化を喜ぶに、此は形態の多趣なるを賞すること、恰も油繪と水墨畫との差あるが如し。同じ菊を見るも彼は色を重んじ、此は形を主とすといふ。西洋の草花のチュールリップ・ピアシンスなど、其の葉に何の趣もなくして、其の花の妖艶なるは、寧ろ我等の眼に毒々しと感ぜらる。秋の野の女郎花、尾花、其の花に何の美しきことかある。されどあるか

藤岡作太郎
余澤の人で東
岡と號した
國文學者で文
學博士である
東京帝國大學
文學部の助教
授であつたが
明治四十三年
歿。年四十一

耳梨山
奈良縣磯城郡
耳成村に有
る。大和三山
の一

なきかの黄花を捧げて、たよくと下蔭の蟲の音にもゆらく
様、ますほの色はやがて白くほゞけて、露に濡れ風に靡く趣い
づれかあはれならざらん。日本人が花を愛するは、其の外形
にあらざ賦色にあらざして、其の風情にあり。直ちに自然の
懐にわけ入りて、其の眞意を握るにあり。斯くしてこそ自然
を愛し自然を尊ぶなれ。自然に親しむことの深きは、これ日
本國民の特性なり。
(藤岡作太郎氏國文學史講話に據る)

二 初瀬の夕

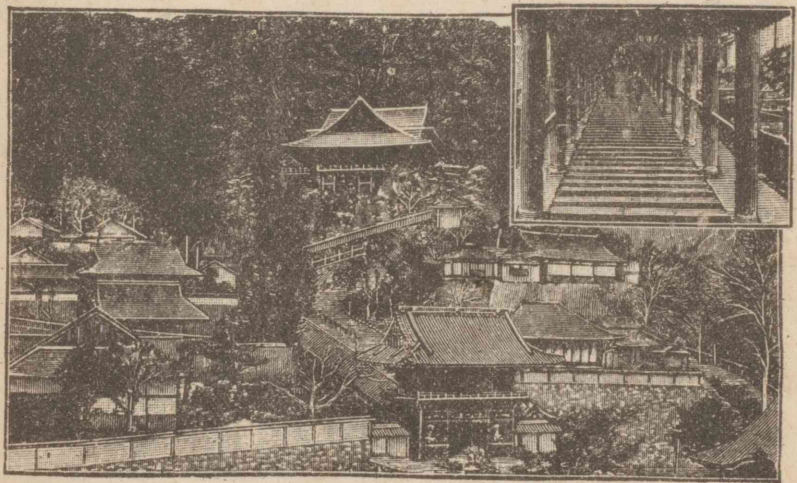
耳梨山を左に天香久山を右に見て東走し、櫻井で汽車を下り
ると、すぐ初瀬行の輕鐵に乗換へる。輕鐵の小さな客車は櫻

天香久山
同縣同郡にあ
る。三山の一
櫻井
同縣同郡
初瀬
同縣同郡に在
る。奈良市の
東南六甲三十
町
長谷寺
初瀬にある。
眞言宗豐山派
西國三十三箇
所第八番札所

井から東を指して、がたくと二十分許り谷間を上つて、終點
初瀬驛に着く。車で石ころの坂路を挽上げられて、初瀬の町
は紀の國屋の店頭に信玄袋をおろすと、すぐ其のまゝ長谷寺
にいそがす。もう秋の日は落ちかけて居る。爪先上りの初
瀬町の往止りて車を下る。西に折れて、石磴を歩いて仁王門
に入る。すぐ廻廊の屋根下である。緩勾配の石段が次第に
上方に導く。數間置きに、金輪の燈籠が下つて居る。廊の左
右は、玉石を疊んだ牡丹の花壇が續いて居る。長谷寺の生命
は此の廻廊にあるのだ。長い長い廻廊は、仁王門から西に攀
上つて北に折れ、稍暫く上つて又西北に折れ、斯くて本堂に上
り着いて居る。百九間半、四百幾十の石段を上り果てて、山腹

二 初瀬の夕

西行法師
源平時代の歌僧。俗名佐藤義清。旅行を好み天下を行脚す
本尊
十一面観音



長谷寺と廻廊

に建てられた本堂の舞臺に出た。世を捨てた西行法師が捨てられて尼になつた昔の妻に、ゆくりなく廻り會うたは此處であつたのか。本尊の観音様は後にして、まづ舞臺の端から見下す。向ふの山も此方の山も、燃えに燃立つ焔の山かとはかり、紅葉は今眞盛りである。初瀬の町は赤地錦の袋に包まれて、其の底に横たはつて居る

鎌倉のと云

神奈川縣鎌倉町大字長谷の海光山長谷寺本尊十一面観音は大和の長谷の観音と同一木で作つたもの

大正二年

作者の参詣した年
玉鬘
源氏物語中に
出る女性の人物。同物語中

のである。
もうほの闇い内陣に、鎌倉のと同作の観音様など拜ませてもらうて居る内に、日は落ちて仕舞うて、焔の山は紫に暮れ、蒼い朦朧の漂ふ谷に響いて、入相の鐘が鳴りはじめた。其の鐘の音に送られながら、我儕も廻廊の降口にかゝる。烟の如く立迷ふ黄昏をほのかに照らして、廻廊には最早燈籠に灯が入つた。黙つて其の灯の連続を見下して居た我儕は、やがてほのかな其の光をたよりに、一段々廻廊の石段を下りはじめた。得も云はれぬいみじの薄あかり。此處に大正二年はない。どうしても源氏物語から拔出して來た白い顔の玉鬘か、さなくば、さし俯く墨染の西行かが上つて來なければならぬ。美

の人物夕顔の
遺児、後に主
人公源氏の養
女となり、髷
黒の大將に嫁
す

しい者あはれ深い者に出遇ふ期待を何處やらに漂はせなが
ら、我儕は一段々廻廊を下るのである。時々立止つて後を
見返ると、昔から限りない人の炷いた心の香が、一つに融合う
て作つたかと思はれる薄青い朦朧を見せて、ほのかな火がほ
つりく上へくと上つて居る。下の方を見ると、下へく
と其の灯が續いて居る。一たび折れる、二たび曲る。最後に
長いく廊の灯が遙かに下に續いて居る。どうしても、誰か
に何かに會はねばならぬ気がする。併し期待は破れた。我
儕は一人にも會はず、到頭三折の長い廻廊を仁王門におり
て了うた。
宿に歸つて、薄暗い風呂場の風呂に入り、別館の奥まつた二階

鶴子

作者の養女、
兄蘇峰の女

徳富蘆花

名は健次郎小
説家文章家

にくつろぐ。秋も暮方の宿山氣膚に迫つて炬燵も欲しい位。
此の一兩日腹工合の悪い鶴子の爲に、粥を註文したら、此の邊
の風習として、常例の夜食にする茶粥を女中が持つて來た。

(徳富蘆花——死の蔭に)

三 長谷寺詣

弓張月の漸う光りて、入相の鐘の音も収まる頃、西行は長谷寺
に着きけるが、問驚かすべき法の友の無きにはあらねど、問ひ
も寄らで、観音堂に参り上りぬ。さなきだに梢透きたる樹々
をなぶりて、夜の嵐の誘へば、はらくと散る紅葉なんどの、空
に狂ひて吹入れられつ、法衣の袖にかゝるも哀れに、また佛前

法華經
法華經普門品
第二十五卷
即ち觀音經

の御燈明の瞬しつゝ、萬般のものの黒み渡れるが中に、いと幽かなる光を放つも趣あり。法華經の品第二十五を聲低う誦するに、何となく平時よりは心も締りて、身に浸みわたる思のすれば、猶誠を籠めて誦し行くに、天も静けく地も静けく、人も全く静まりたる、時といひ處といひ相應じて、我が耳に入るは我が聲ながら、若しくは隨喜佛法の鬼神などの、聲を和せて共に誦するかと疑はるゝまで、上なく殊勝に聞え渡りぬ。特に参りたるかひは有りけり。菩薩も定めしかゝる折のかゝる所作をば善しとして、必ず納受し給ふなるべし。今宵の心の澄みきりたる、此の清しさを何に比べん。餘りに有難くも尊く覺ゆれば、今宵は夜すがら、此の御堂の片隅になり趺坐して、

曉方になほ一度誦經し参らせて、さて其の後香華をも供して罷らんと、西行やがて三拜して、御前を少し退り、影暗き一隅に身をねぢ据ゑ、凍れる水か枯れし木かの、動きもせねば音も立てず、寂然として坐し居たり。

夜は沈々と漸く更けて、風も睡れる如くなりぬ。右左に並びて立ちける御燈明は、一つ消え又一つ消えぬ。今は只いと高き吊燈籠の光朦朧として力なきが、夢の如くに残れるのみ。

此の寺の僧どもは寒氣に怯ちて、所化寮に爐をや圍みてあるらん、影だに終に見するもの無し。いふべき方もなく静かなれば、日比焼きたる餘氣なるべし、今薰ゆるとにはあらぬ香の有るか無きかに自ら匂を流すも、いと能く知らる。かゝるを

りから、何者にか此方を指して來る足音す。御佛に仕ふる此の寺の者の燈燭をつぎまゐらせんと來つるにやと打見るに、御堂の外は月の光白々として、霜の置けるが如くに見ゆるが中を、寒さに堪へてや、頭には何やらん打被きたれど、正しく僧の形したるが歩み寄るさまなり。心をとゞむとにはあらざれど、何としもなくなほ見てあるに、やがて月の及ばぬ闇の方へ身を入れたれば、定かには知れぬながら、此の御堂に打向ひて、一度は先づ拜みまつり、さて靜々と上り來りぬ。御堂は狭からぬに、燈は螢ほどなり。燈の高さは高し、互の程は隔たりたり。此方を彼方は有りとも知らず、彼方を此方は能くも見得ねば、西行は唯我と同じき心の人も亦有りけるよと思ふの

みにて打過ぎたり。彼方は固より闇の中に人有ることを知らざれば、何心を置くべくもなく、御佛の前に進み出でつ。いとつゝましげにかしこまりて、數多たび合掌禮拜し、一心の誠を致すと見ゆ。同じ菩提の道の友なり。其の心操の淺まならぬも、夜深の參詣に測り得たり。衣の色さへ辨ち得ざれば、面はまして見るべくは無けれど、淨土の同行の人なるものを、呼掛けて語らばや、名をも問はばやと、西行は胸に思ひけるが、卒爾に物言はんは悪しかるべし、祈願の終つて後にこそと、心を控へて窺ふに、彼方は珠數を取出し、さやくとばかりすり始めたり。針の落つる音も聞くべきまで、物靜なる夜の御堂の眞中に在りて、水精の珠數を擦る音の亮かなる響いと牙え

て神々し。御經は心に誦すると覺しく、萬籟絶えたるに、珠數の音のみを唯緩やかに響かす。其の聲或は明かに、或は幽かに、或は高く、或は低く、寢覺の枕の、半ばは夢に霰の音を聞くが如く、朝霧晴れぬ池の面に、菡萏ハナトウの急に開くを聞くが如く、小川の水の獨り咽ぶか、雨の紫竹の友ずれか、山吹匂ふ山川の蛙鳴くかと過たれて、一聲聲中に萬法あり、皆與實相不相違背」とい

とをかしくも聞きなされるれば、西行感に入つてありけるが、期したる程の事は仕果てしにや、其の人珠數收めて、御佛をば禮拜すること數多たびしつ。やをら、身を起して退らんとす。菩提の善友、淨土の同行、契を此の土に結ばんには、今こそ言葉を懸くべけれど、

皆與實相云々

法華經第六卷にある語

思ひ入りて擦る珠數の音の聲澄みて

おぼえずたまる我がなみだかな

と、歌の調は好かれ悪しかれ、西行俄かによみかくれば、彼方は始めて人あるを知り、思ひがけぬに驚きしが、何と仰せられしぞ、今一度と、心を押鎮めて問ひかへす。聞きとりかねけんと猜するまゝ、思ひ入りて擦る珠數の音の聲澄みて。と復び言へば、後は言はず、君にておはせしよ、こはいかに。と、涙にふるふおろく、聲、言葉の文ウチもしどろもどろに、身を投伏して取附きたるは、聲音に紛ふかたもなき、其の昔の我が妻にぞありける。

(幸田露伴——二日物語)

幸田露伴
名は成行。文學博士。小説家、文學者

四 良寛の遺蹟

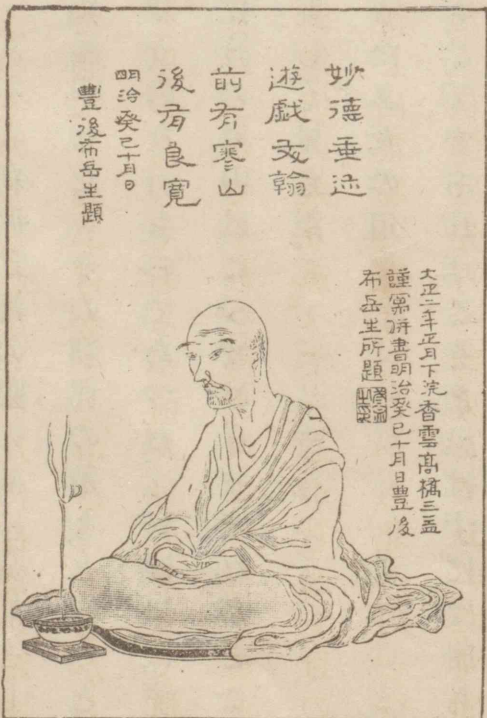
良寛 越後の俳僧。國上寺に住んだ。天保二年、七十五歳、出雲崎、越後國三島郡寺泊、同郡歸國、二十餘年間中國・九州を行動して歸る。寛政十一年の頃

私は案内者を得て出雲崎へ行つた。出雲崎は、寺泊から海岸に沿うて歩けば四里程の道のりしかなく、それに良寛が歸國當時、假の宿りを求めた郷本と云ふ村もその中途にあるから、私はその道を取らうと思つたのであるが、前々日の暴風で、道がひどく壞れてゐると云ふので、やむを得ず汽車で行くことにした。寺泊から長岡鐵道に乗りかへて、そこから四つ目の驛が出雲崎である。併し出雲崎の町は、そこから北へ、山一つ越えた一里先にあつた。私達は、先方へ約束しておいた時間もあつたので、そこから更に人力車に乗つた。道は車に乗つてゐるのが却て苦しい程の山道であつた。眼の下に谷合の

村を見て通るやうな處もあつた。今にも倒れさうに突立つた崖の下を、びく／＼しながら通るやうな處もあつた。

さう云ふ間を通りながら、私の理想裡には、時々、其のあたりの道をとぼとぼと辿つてゐる一人の托鉢僧の姿がちらついて見えた。

良寛上人



妙徳垂迹 遊戯文翰 前有寒山 後有良寛 明治癸卯十月 豐後布岳生顯

大正二年五月下流香雲高橋三五 謹將畫明治癸卯十月日豐後 布岳生所題

出雲崎云々 良寛の歌

出雲崎いにしへ人のふみにけん 道をたどりてわれは行くかも

かう云つたやうなこともしみて感じられた。

こんな風にしてほゞ一時間も過ぎたかと思つた時、車はとある小山の端を廻つた。と、その刹那、私達の眼の前に、突如として、海—廣々とした海が展開した。その刹那の驚きと快さとは、まつたく云つて見やうのないものであつた。私は思はず感嘆の聲を發した。佐渡の島山は、こゝでは今まで私がどこで見たよりも鮮かに美しく見えた。

荒海や佐渡によこたふ天の川

かう芭蕉の歌つたのも、こゝであればこそと思はずには居られなかつた。

出雲崎の町はすぐ眼の下にあつた。つい先頃焼けたばかり

の焼跡を中央にして、東西に一本長く、伸びた眼下の港町は、私の眼にはたまらなく懐しく見えた。わが良寛の生れた町、わが良寛の育てられた町、そしてわが良寛が剃髪した町。坂を下つて出雲崎の町へ入つた私達は、先づ大字尼瀬町の佐藤氏を訪ね、其の指圖で同じ町の熊木と云ふ旅館に入つた。案内された部屋は、海の中へ造り出した中二階で、欄に倚つて見れば、すぐ自分達の座敷の下で波が打つてゐる。廣々とした海の眺め、翠に浮ぶ佐渡の島も、居ながらにして見ることが出来た。

いにしへにかはらぬものはありそみと

向ひに見ゆる佐渡が島なり

榮藏
良寛の幼名

然を朝な夕な見つゝ育てられた彼の少年時代乃至青年時代の初期のことなどを頭に浮べてゐた。ふと間近の波打際で、ばちやゝ泳いで居る五六人の子供の群が眼に止つた。私は彼等のうちにも、少年時代の良寛の俤を求めた。そして口碑を思ひ合せて、幼い頃から他の子供と交ることをあまり好まなかつたと云はれてゐる少年榮藏が、唯一人群から離れて、ぎらゝと日の照る岩の上に座つて、ぼんやり海を眺めてゐた姿を空想に描いたりした。

たらちねの母がみ國と朝夕に

佐渡が島べをうち見つるかな

またしても良寛の歌がおもひ出された。彼はさうした懐し

相馬御風
名は昌治、文
學者

ふみの名
孝經のこと

さを以て、朝夕に、あの夢のやうに見える佐渡の島山を眺めつつ、更にその島を舞臺にした古來のさまざまの時代的犠牲者の悲劇について、とりとめのない空想を描きながら、いつまでもいつまでも磯邊に立ちつくしてゐたことであらう。又雪と嵐と浪と凄まじく荒れ狂ふ冬の日などには、終日薄暗い家の内に閉ぢこもつて、深い冥想に耽りながら時を過した事であらう。私はそんな事を、さまざまに想像しながら、旅館の夜の更けてゆくのを、も忘れてゐた。(相馬御風——大愚良寛)

五 いさよふ月

むかし、壁の中より求めいでたりけむふみの名をば、今の世の

みづぐきの岡

水壑の岡の葛葉を吹きかへしおも知る兒等が見えぬころかも(古歌)

神樂の詞
「あはれあな
おもしろ、あな
なたのし、あな
なさやけ、お
け。」
世を治め云
紀貫之の古今
集の序に見
ゆ

人の子は、夢ばかりも身の上のこととは知らざりけりな。みづぐきの岡の葛葉、かへすも書置くあとたしかなれども、かひなきものは親のいさめなり。また賢王の人を捨て給はぬまつりごとにも漏れ、忠臣の世を思ふなさけにも捨てらるるものは、數ならぬ身ひとつなりけりと思ひ知りながら、またさてもあらで、なほこのうれへこそやる方なく悲しけれ。さらに思ひつゝくれば、やまと歌の道は、たゞまことすくなく、あだなるすさびばかりと思ふ人もやあらむ。日の本の國に、天の岩戸ひらけし時、よもの神たちの神樂の詞をはじめ、世を治め物をやはらぐるなかだちとなりける。さても又集をえらぶ人ひじりたちは記し置かれたりける。

二たび勅を
藤原定家新古今集と撰び、その子爲家も亦續後撰集と撰んだ
三人のをのこ子
俊成 定家
爲家 爲氏
爲教 阿佛
爲顯 尼の
爲相 子
爲守 爲守

細川
播磨國美藝郡
細川庄

子を思ふ
人の親の心は
闇にあらねど
も子を思ふ道
に惑ひぬるか
な(平兼輔)

はためし多かれど、二たび勅を受けて、世々にきこえあげたるは、たぐひなほあり難くやありけむ。そのあとにしもたづさはりて、三たりのをのこ子ども、ちの歌のふる反古どもをいかなるえにかありけむ、あづかりもたることあれど、道をたすけよ、子をはぐ、め、後の世をとへ。とて、深き契をむすび置かれし細川のながれも、ゆゑなくせきとめられしかば、あと訪ふ法のともし火も、道をまもり家をたすけむ親子の命も、もろ共にきえをあらそふ年月を経て、あやふく心ほそきものから、何としてつれなく今日まではながらふらむ。惜しからぬ身ひとつは、やすく思ひすつれども、子を思ふ心の闇は、なほ忍びがたく、道をかへりみるうらみはやらむ方なく、さてもなほあ

み冬たつは
じめ
建治三年十月

人やりならぬ

人やりの道ならなくに大方はいきうしといひていざ歸りなむ(古今集、源實)

侍従

爲相。冷泉家の祖、當時十五歳

大夫
爲守。後出家して曉月とい

づまの龜の鑑に映さば、曇らぬ影もやあらはるゝと、せめて思ひ餘りてよろづのはかりを忘れ、身をえうなき物になしはててゆくりもなくいさよふ月にさそはれいでなむとぞ思ひなりぬる。ころはみ冬立つはじめのさだめなき空なれば、ふりみふらずみ時雨も絶えず、嵐にきほふ木の葉さへ、涙と共にみだれ散りつゝ、事にふれて心ぼそく悲しけれど、人やりならぬ道なれば、いき憂しとてもとまらるべきにもあらで、なにとなくいそぎ立ちぬ。目かれせざりつるほどだに、荒れまさりつる庭もまがきも、ましてと見まはされて、したはしげなる人の袖の雫も、なくさめかねたる中にも、侍従大夫などの、あながちにうち屈したるさま、いと心苦しければ、さまゝいひこ

ふ、當時十三歳

しらへぬ。代々に書置かれける歌の草紙どもの奥書などして、あだならぬ限りを選びしたゝめて、侍従のかたへ送るとて書きそへたるうた、

和歌の浦にかき留めたる藻鹽草

これを昔のかたみとも見よ

あなかしこよこ浪かくな濱千鳥

一方ならぬあとをおもはば

これを見て、侍従のかへりごといと疾くあり。

ついによも仇にはならじ藻鹽草

かたみをみよの跡にのこさば

まよはまし教へざりせば濱千鳥

ひとかたならぬ跡をそれとも
このかへりごといとおとなしければ、心やすくあはれなるに
も、昔の人に聞かせ奉りたくて、またうちしをれぬ。大夫の傍
去らず馴來つるを、振捨てられなむ名残あながちに思ひ知り
て、手習したるを見れば、

はるくとゆくさき遠く慕はれて

いかにそなたのそらを眺めむ

と書きつけたるものよりことにあはれにて、同じ紙に書きそ
へつ。

つくくと空を眺めそこひしくば

道とほくともはやかへりこむ

とぞ慰むる。

(阿佛尼——十六夜日記)

阿佛尼
藤原爲家の後
妻歌人北條
時宗の頃の人

もとに

六 野村望東尼

野村望東尼は筑前福岡の藩士浦野勝之の娘で、俗名をもとと
云ひました。望東尼とは出家した後の名です。

もと女は天性歌の道に堪能で、若い時分から、秀逸の作を出し
ては世間を驚かしました。雷に文才に秀でて居たばかりで
なく、性質も極めて温順で藩中での評判娘であつたのでござ
います。二十四歳の時、同藩の士野村貞貫に嫁しましたが、才
學並び具はつてゐる上に、温順に夫に事へましたから、一家は
常に春風駘蕩和氣堂に満つといふ有様でした。夫貞貫は不

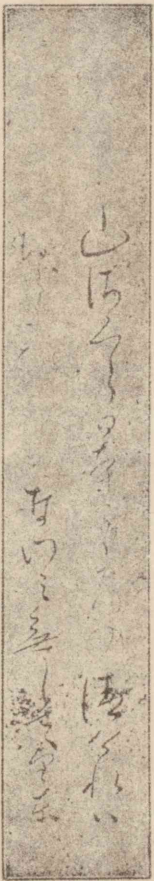
仕官を辭す
時にもと女四
十一歳

筆蹟

山さくら日本
ころの清け
ればちるもひ
らくもなつみ
無して

望東

圖した事情のために、俄かに仕官を辭しました。そこで共に
城下を引拂つて、邊鄙な平尾村に草庵をしつらひ、其處へ移り
住むことになりました。今は松風蘿月の生活で、別に爲すべ
き事としては無く、もと女は又素より好む所であるから、只管敷



望東尼
の筆蹟

島の道を楽しみ、折さへあれば、書物に眼を曝したので、大層學
問も進歩しました。ところが、不幸にして夫は病に冒され、段
段重態に陥つて、もと女が身を粉にしての看護も、其の甲斐な
く、たうとう不歸の客となつてしまひました。氣丈のもと女
も落膽一通りで無く、其の後はひとへに夫の冥福を祈らうと

尼になり
時に五十四歳

決心して尼になり、本名の「もと」を取つて、望東尼と申しました。
時は恰も徳川幕府の末でございませうから、國內の騷擾は一通
りでありませぬ。先に幕府が外國と修好條約を締結した爲
に國論一時に沸騰し、或は鎖港攘夷を唱へる者、或は此の時に
乗じて、幕府を倒し王政を復古しようとして、尊王討幕を説く
者、或は従前の如くに幕府を助けて、内治外交の處置をしよう
といふ所謂佐幕黨もあつて、志士の國難に殉ずる者も少なく
無かつたのでございませぬ。

望東尼は前申す通り、若い時から和歌に堪能であつたので、自
然國學をも研究して、我が國體に就いては深く知る所があり
ました。随つて至尊を措いて幕府が政柄をとり、擅に天下に

高杉晉作

山口藩士。號は東行、勤王家。慶應三年歿、二十九歳

號令するのを、常々如何にも残念なことだと思つて居りました。其の矢先に此の度の騷擾があつたのでございますから、女ながらも勤王の志を固め、長州の高杉晉作、其の他の尊王の志士とも交り、折もあつたら己も微力を致したいものと、心竊かに考へて居りました。

燈火も消えようとする前には、更に閃々たる光を放ちます。

幕府の倒れようとするに當つても、一時佐幕黨は其の勢力を加へて來ました。殊に徳川の権力で、勤王の志士を壓迫しますから、正義の士は何れも切齒扼腕、血涙に咽びながらも、身を隠すより外はありません。所が望東尼の庵室は人里離れた山中で、志士の隠場所には最も適當なので、多くの志士は危難

の身に迫る毎に此所へ逃込んで來ます。望東尼はそれを手厚く待遇して、力の及ぶかぎり衣服食物なども給して居りました。

丁度其の頃、討幕を唱へて而も事志と違ひ、難を長州に避けて居つた三條實美公始め七人の公卿方は、更に筑前藩へお預けとなつて、太宰府に居られました。尼は此の事を聞くと、わざ／＼出向いて、此の公卿方を訪ねて、懇ろに慰めました。三條公は尼の誠心を嘉せられて、

すめらぎのたゞしき道をふむ人は

千とせのさかをやすくこゆらん

と云ふ一首を詠じて與へられました。

七人の公卿

三條實美、三條西季知、東久世通禧、錦小路頼徳、四條隆爾、壬生基修、澤宣嘉

後この七卿に謁見した事が幕府の知る所となると、其の尼油断ならず直ちに召捕れ。といふことになり、なほ色々の嫌疑をも受けて、あはれ六十歳の老尼は、獄屋の人となつたのでございます。其の時の歌に、

浮雲のかゝるもよしやものゝふの

やまとごゝろの數に入りなば

といふのがあります。これは慶應元年の夏のことでございます。

姫島
博多灣頭にあ
る

尋いで姫島といふ島へ流されましたが、此所でも極めて狭い牢屋に入れられ、天吹く風巖打つ波の音を聞くにつけても、勤王の志士を思ひ、皇運の開けることばかりを念じて、中宵夢を

成さぬ事も幾度か知れない程でした。「姫島日記」は其の時認めためたもので、やさしい水莖の間に、血あり涙ある文字を残したものであります。

斯くする中に、老尼の健康は次第に衰へて來ました。心の惱と體の疲とが、老の身を倒さうとかゝつたのであります。折よく此の事が長州方に漏聞えしました。「こは猶豫ならず」と、高杉晋作等は一夜風雨に乗じて、姫島へと押渡り、獄を破つて尼を救ひ出し、一旦馬關へ連歸り、間もなく更に周防の三田尻へ伴なつて靜養させました。何分にも老體の上、非常に疲勞して居りますので、病氣は次第に重るばかり。藩主毛利氏も殊の外目をかけられて、或は御見舞の品を下され、或は典醫に脈

三田尻
今、山口縣防
府町の中

慶應三年
二五二七年

佐々政一

文學博士、國
文學者。大正
六年歿、四十
六歳

高倉院

第八十代の天
皇

延喜天曆の
帝

醍醐天皇及び
村上天皇

を取らせなどして、種々に手をつくされましたが、命數の盡き
る時は如何とも致方の無いもので、卒に養生も叶はないで、慶
應三年十一月の十三日に、英魂空しく此の土を去つてしまひ
ました。享年は六十有二。
(佐々政一)

七 紅葉の山

高倉の院御在位の御時、人の従ひつき奉ることは、恐らくは延
喜天曆の帝と申すも、これにはいかで勝らせ給ふべき」とぞ人
申しける。大方は賢王の名をあげ、仁徳の行を施させおはし
ますことも、君御成人の後、清濁を分たせ給ひての上の御事に
てこそあるに、むげにこの君はいまだ幼主の御時より、性を柔

和に受けさせおはします。

去んぬる承安のころほひは、御年十歳ばかりにもやならせお
はしましたけん。あまりに紅葉を愛せさせ給ひて、北の陣に小
山を築かせ、榎楓の誠の色うつくしうもみぢたるを植ゑさせ、
「紅葉の山」と名づけて、ひねもすに観覽あるに、なほ飽きたらせ
給はず。然るをある夜野分はしたなう吹きて、紅葉みな吹き
ちらし、落葉すこぶる狼藉たり。殿守のとものみやつこ、朝ぎ
よめすとて、これを悉く掃きすててけり。残れるえだ散れる
木の葉をば掻集めて、風すさまじかりける朝なれば、縫殿の陣
にて、酒を煖めてたべける薪にこそしてけれ。
奉行の藏人、行幸よりさきにと、いそぎ行きて見るに、あとかた

承安

高倉天皇の年
號

縫殿の陣

前に北の陣と
あるに同じ

林間煖酒云
唐の白居易の
詩句
安元
高倉天皇の年

なし。「いかに」と問へば、「しかん」と答ふ。「あなあさまし、さし
も君の執し思しめされつる紅葉を、かやうにしつることよ。
知らず、汝等禁獄流罪にも及び、わが身もいかなる逆鱗にか預
らんずらん」と思はじ事なう案じつゞけて居たりけるところ
に、主上いとゞしく夜のおとゞを出でさせもあへず、かしこへ
行幸なりて、紅葉を觀覽あるに、なかりければ、「いかに」と御尋あ
りけり。藏人何と奏すべき旨もなし。ありのまゝに奏聞す。
天機殊に御心よげにうち笑ませたまひて、林間煖酒、燒紅葉、と
いふ詩のこゝろをば、さればそれらにはたが教へけるぞや。
やさしうも仕りたるものかな」とて、却つて觀感にあづかりし
上は、あへて勅勘なかりけり。又安元のところほひ、御方違の行

院、
後白河法皇

幸のありしに、さらでだに、鶏人曉を唱ふる聲明王の眠を驚か
すほどにもなりしかば、いつも御寢覺がちにて、つやゝ御寢
もならざりけり。いはんやさゆる霜夜のはげしきには、延喜
の聖代、國土の民どもがいかに寒かるらん」とて、夜の御殿にし
て、御衣を脱がせ給ひけることなどまでも思召し出でて、わが
帝徳の至らぬ事をぞ御なげきありける。やゝ深更に及んで、
程遠く人のさけぶ聲しけり。供奉の人々は聞きもつけられ
ず。主上は聞しめして、「たゞ今さけぶは何者ぞ。あれ見てま
るれ」と仰せければ、上臥したる殿上人、上日のものに仰せて尋
ぬれば、或辻にあやしの女の童の、長持の蓋さげたるが泣くに
てぞありける。「いかに」と問へば、「主の女房の、院の御所に候は

堯
支那古代の聖
主

せ給ふが、この程やうくにして仕立てられたりつる衣を持
ちて參るほどに、唯今男の二三人まうで来て、うばひ取りてま
かりぬるぞや。今は御装束があらばこそ、御所にも候はせ給
はめ。又はかゝしく立宿らせ給ふべき御方もましまさず。
これを思ひつゞくるに泣くなり。とぞいひける。
さてかの女童を具してまゐり、この由奏聞したりければ、主上
聞しめして、「あな、むざん、何者のしわざにかあるらん。」とて、龍顔
より御涙を流させ給ふぞかたじけなき。「堯の世の民は堯の
心のすなほなるを以て心とする故に、皆すなほなり。今の世
の民は朕が心を以て心とする故に、かたましきものありて罪
を犯す。これ朕が恥にあらずや。」とぞ仰せける。「さるにても

建禮門院
高倉院の皇后
平徳子

平家物語
平家一門の興
亡を叙した軍
記物語。普通
十二卷。鎌倉
時代の作。作
者不詳

碓氷
上野・信濃兩
國に互る

取られつらん衣は何色ぞ。」と仰せければ、しかくの色と奏す。
建禮門院その時はいまだ中宮にて渡らせ給ふ時なり。その
御方へ、「さやうの色したる御衣や候。」と御尋ありければ、先の上
り遙かに色美しきがまゐりたるを、件の女の童にぞ賜はせけ
る。「未だ夜深し。又さる目にもや遭はん。」とて、上日の者を數
多つけて、主の女房の局まで送らせましくけるぞかたじけ
なき。さればあやしの賤の男賤の女に至るまで、只この君の
千秋萬歳の寶算をぞ祈りたてまつる。
(平家物語)

八 碓氷より

碓氷の絶頂より半道あまりの間は、薄と松との世界にて、紅葉

は殆どこれなく、あるも已に散りたるあとにて、たゞ骨ばかりなる樹木叢をなし、其の間に枝ぶり面白く、染めたるやうに翠なる松の、此處に一本、彼處に一本、まばらに散在して風致を添へたると、枯薄の限りなく山に満ちて、山も亦白頭となりしかと思はるゝ程なるのみに御座候。此の薄の山を過ぎ候折節、淺間の方俄かに搔曇り、麓は日影明かにさしながら、山は一點二點の時雨ばら〜と帽に落ち申候。

時雨るゝや薄分けゆく山三里

など打吟じて急ぎ候程に、滿山の時雨薄に落ち、恰も人の物言ふやうに御座候。空山聲なく、唯時雨の枯薄に落つる音と、時に木がらしの一陣樹間にわたりて、落葉さら〜と鳴る音と、

孟郊
支那唐代の詩人、字は東野

高尾
山城國葛野郡

遙かの谷底を姿は見せず流れ行く碓氷川の川音の、松風にまがひて山中に滿つるとのみにこれあり候。一心水の如く澄んで、なんとなく氣森然と改まりたるやうに覺え候は、孟郊の所謂、山中人自ら正しきものにも候べきか。路は落葉多き處に入つて、時雨ます〜音高く相成候。

遊蹤狭き小生の事とて、紅葉と云へば、たかが京都高尾の秋を見たるばかりの眼は、今一驚を喫し候。何かなし吾が立つ岨を中心として、碓氷の東面は盡く錦に候。左方の山谷を見れば、唯これ一面の錦、右の山谷を見れば、又これ唯一面の錦、滿山の焰、五色の焰峯と云はず、谷と云はず、たゞ燃えに燃立つ美觀、殆ど壯觀、小生も覺えず、嗚呼。と叫び申候。其の黄色、淡黄色、褐

八 碓氷より

色、黄褐色、其の他思ふべくして言ふべからず、見るべくして思ふべからざる、ありとあらゆるちみなる錦の地に、遙か彼方の岩の上に、朱の如き黄紅の楓一樹、此方の谷の庭に、鮮血の如き浅紅の枝一枝、彼處の松の隣に夕焼の色よりも濃き深紅の兩三本、さながら一山を照す、炬火の如く、萬段の錦の色を一時に呼びさまし來るを見たる時には、小生は唯詩才のなきを恨み候。況や浅間時雨は全山に水を洒ぎて去り、深碧の空は明鏡の如く上より照らし、今正に碓氷の西南に廻り來りし午日は、億萬條の金光線を、惜氣もなく山に谷に漲り下らしめ候をや。此の峯に山人の棲みわぶる家一つ二つ有之、小生その家の前を過ぎ候時、主人に向ひて、「紅葉が好いね。」と云へば、「は、紅葉かね。」

白氏

支那唐代の詩人。名は居易、字は樂天。

と申候。彼等は紅葉に包まれて生活するなれば、何の珍しげもなく、詩一首、歌一句作ることなく、恐らくは唯一度の嘆美の辭をだに與ふることなく、白氏の風流を知らず、紅葉を焚きて茶を沸し、朝夕の山の上下りにも、あたら錦を踏みにちり、斯くて年々紅葉を迎へ紅葉を送るにぞあらんずらん。吾が山を慕ふ如く、彼等は都を戀ふらんか。何れか得、何れか失、神ならで誰か知るべきなど思ひつゝ、行くく道は谷に下りて、再び一驚を喫し候。顔照る焰に、山火事に取卷かれしには非ずやと、半秒時は驚き候。併し此の火は唯自ら焼くのみ候。戯言はさておき、小生の周圍に屏風を立廻らしたる如き山は、其の裾を洗ふ碓氷川より、其の青天を戴く冠頭に到るまで、眞

個に立錐の地もなきまで、一面に紅葉の衣をつけ、色といふ色
 木と云ふ木（言ち）（里ち）堆又堆、叢又叢、色相争ひ彩相競ひ、眼を焼き魂を焦
 して爛然照渡り、仰ぎ見れば碧空蓋の如く上にあり、靜かに佇
 立して眺むれば、恍惚として夢の如く美しく候。要するに、碓
 氷の全山固にこれ天公一篇自然錦綉の文に候へども、此のあ
 たりは、少なくとも一篇中の精彩の其の一に居ること、疑を容
 れず候。

横川より一里の所に、力餅を賣る茶店有之、同所に到れば、碓氷
 の右を通る舊道、中央を通る汽軍道、左を通る新道、皆一所に落
 合ひ、碓氷三里紅葉の觀は此處に終り候。
 （徳富蘆花——青蘆集）

横川
 上野國碓氷郡
 白井町の驛名

九 秋窓雜記

△

かなしきものは秋なれども、また心地好きものも秋なるべし。
 春は俗を狂せしむるに宜しけれど、秋の士を高うするに如か
 ず。花の人を酔はしむると月の人を清ましむるとは、自ら味
 を異にするものあり。喜樂の中に心の捕はるゝは、世俗の免
 るゝ能はざるところながら、我は萬木凋落の期に當り、靜かに
 物象を察するの快なるを擇ぶなり。

△

我が庵も亦秋の光景は乏しからざりけり。喉啼きやぶるば
 かりの鶉（ウツ）の聲々、高き梢に聞ゆるに、窓開きてそこかこゝかと

うち見れば、そこにもあらず、こゝにもあらず。窓を閉ぢて書を披けば、一層高く聞ゆめり。鳥の聲ぞと聞けば鳥の聲なり、秋の聲ぞと聞けば、おもしろさ讀書の類にあらず。

△

萩薄我が庭に生ふれど、我は在來の詩人の如く、此等の草花を珍重すること能はず。我は荒漠たる原野に、名も知れぬ花は愛づる心あれども、園藝の些技にて作り出でたる矮小なる自然の美を、さほどに嬉しと思ふ情なし。さはいへど、敢て在來の詩人を責むるにはあらず、又自己の愛する所を言はんとにもあらず。唯我が秋に對する感の一として記するのみ。

△

鴉こそをかきものなれ。我が山庵の窓近く下りたちて、我をながし目に見おこしたる後、逐へども去らず、叱すれども驚かず、やゝともすれば、脚を立て首を揚げて、飛去らんとする氣色は見すれど、わが害心なきを知ればにや、たゞ足を揃へて跳歩くのみ。浮世は廣ければ、かゝる曲者を置きたりとて、何の障にもなるまじけれど、其の塵芥ある處に集り、穢物ある處に群るの性あるを見ては、人間の往々之に類するもの多きに想ひ到りて、聊か心悪くなりたれば、物を抛ぐる眞似しけるに、忽ちに飛去りぬ。飛去る時、かあゝと鳴く聲は、我が局量を嘲る者の如し。げに皮肉家と云ふもの、文界のみにはあらずりけり。

夜更けて枕の未だ安まらぬ時、蟋蟀の聲を聞くは、眞の秋の情なるらん。その聲を聞く時に、希望もなく、恐怖もなく、欣樂もなし。世の心全く失せて、秋のみ胸に充つるなり。松蟲・鈴蟲のみ秋を語るにあらず。古書古文のみ物の理を我に教ふるにあらず。一蟋蟀の爲に、我は眠の惜しまれて、物思なき心を宿しけり。

△

芭蕉の葉秋風に動いて籬を蓋へる微かなる住家より、ゆかしき音の洩れきこゆるに、つと立止りて、そが中を覗ひ見れば、年老いたる盲女の琵琶を弾ずる面影、凜乎として俗世の物にあ

北村透谷
明治時代の文
學者

啼く音の愛

蝶籠の苦を受
けん(西山宗
因)

莊周が夢

蝶と化したこ
と。莊子にあ
る

古今の序

花に鳴く鶯水
にすむ蛙の聲
をきけばいき
としげれるも
のいづれか歌
をよまざりけ
る(古今集)

古池に云々
古池や蛙とび
こむ水の音
(芭蕉)

らず。その律調の端正なること、今の世の浮華なる音楽に較ぶべからず。うれしき事に思ひぬ。(北村透谷—透谷集)

一〇 百蟲譜

手をつて歌申よ、特かな
蛙なく夜、夜も重し

蝶の花に飛びかひたる、やさしきものの限りなるべし。それも啼く音の愛なければ、籠に苦しむ身ならぬこそなほめでたけれ。さてこそ莊周が夢も、このものには託しけぬ。蛙は古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたること幸なれ。臙月夜に風しづまりて、遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで翁の目をさましたれば、この物の事さらにも誇りがたし。蟬はたゞ五月晴に聞きそめたるほどがよきなり。やゝ日ざ

チカマ
部

やがて死ぬ
しがて死ぬけ
しきは見えず
蟬の聲(芭蕉)

貧の學者
晉の車胤貧し
くて油を得
ず、夏月數十
の螢火を練囊
に入れて書を
讀んだといふ

かりに啼きささかる頃は、人の汗しぼる心地す。されば初蝶と
も初蛙ともいふ事をきかず、この者ばかり初蟬といはるゝこ
そ大いなる手がらなれ。「やがて死ぬけしきは見えず」と、この
ものの上は、翁の一句に盡きたりといふべし。
螢は比ふべきものもなく、景物の最上なるべし。水に飛びか
ひ草にすたく。五月の闇は、たゞこのものの爲にやとまでぞ
覺ゆる。しかるに貧の學者にとられて、油火の代りにせられ
たるは、このものの本意にはあらざるべし。
日ぐらしは多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、
夕は草に露おく頃ならん。つくつくほふしといふ蟬は、つく
し戀しといふなり。筑紫の人の旅に死にて、この者になりた

筆蹟
二つからちき
り始るなすひ
かな 也有

七賢
竹林の七賢
阮籍・嵇康・山
濤・向秀・劉伶
・王戎・阮咸



贊 自 畫 自 の 有 也

りと、世の諺にいへりけり。あはれは蜀魂の雲に叫ぶにも劣
るべからず。

蚊は憎むべき限りながら、さす
が卯月の頃、端居めづらしき夕、
始めてほのかに聞きたらん、又
は長月の頃、力なく残りたるは、
さびしきかたもあり。蚊帳釣
りたる家のさま、蚊遣焼く里の
煙など、かつは風雅の道具とも
なれり。藪蚊は殊にはげしきを、かの七賢の夜咄には、いかに
團扇の隙なかりけん。蠶の生涯は世の爲に終り、火とり蟲は

蓼くふ蟲
蓼喰ふ蟲もす
きずき(俚語)

千丈の堤
千丈隄以三蛟
蟻穴一潰
(韓非子)

螳螂
猶三螳螂之怒
臂以當車轍
(莊子)

たがために身をこがすにか。蜂虿ははかなきためしにひかれ、蓼くふ蟲は物ずきの謗となれり。おなじ寶の名によはれて、玉蟲はやさしく、こがね蟲はいやし。蟻は明暮にいそがしく、世の營に隙なき人には似たり。東西に聚散し、餌を求めてやまず。さるもたより悪しき方に穴を營みて、千丈の堤は崩さずもあらなん。蝸牛は家をもちたれども、行く先々を負ひあるくは、水蜘蛛の安きにも似ず。蛇、蚯蚓の足なくとも歩むべくば、蜈蚣をさむしの數多きは不用の事なり。螳螂の瘦せたるも、斧を持ちたる誇より、その心いかつなり。人の上にもこのたぐひはあるべし。

原・吉原
駿河國に在る

さりざりす
秋風にほころ
びぬらし藤は
かまつりさ
せてふきりさ
りす鳴く
(古今集)

藻にすむ蟲
あまのかる藻
にすむむしの
われからとね
をこそ泣かめ
の世をばうらみ
じ(古歌)

横井也
名は時敷。俳
人。名古屋。俳
士。天明三年
政。八十二年

蟹の歩みにたとふべきものこそなけれ。たゞ原吉原を駕にのりて、富士を眺めゆく人にぞ似たる。

促織・鈴蟲・轡蟲は、その音の似たるをもつて名によべり。松蟲のその木にもよらぬに、いかでかく名を附けたるならん。毛生ひむくつけき蟲にも同じ名ありて、松を枯らし人にうとまる。一つ在所に、二人の八兵衛ありて、一人は後生を願ひ、一人は殺生を事とす。これ松蟲のたぐひなるべし。きりくすのつゞりさせとは、人のために夜寒を教へ、藻に住む蟲はわれからと、たゞ身のうへをなげくらんを、蓑蟲の「ちよよ」と呼ぶは、母をば慕はで、など父をのみ戀ふらんとあやし。

(横井也有——鶉衣)

一一 秋のあはれ

一 秋の夜

庭の芭蕉のいと高やかに延びて、葉は垣根の上、やがて五尺もこえつべし。「今歳はいかなれは、かくいつまでも丈のひくきことよ。」など言ひてしを、夏の末つかた、極めて暑かりしに、只一日二日三日とも數へずして、驚くばかりになりぬ。秋風少しそよく、とすれば、はしのかたよりあへなげに破れて、風情次第に淋しくなるほど、雨の夜の音をひ、これこそはあはれなれ。細かき雨はらく、と音して、叢がくれ鳴くこほろぎのふしをも亂さず、ひとしきり颯と降りくるは、かの葉にばかりかゝる

もいたまし。雨はいづれあはれなる中に、秋はまして身にしむこと多かり。

更けゆくまゝに、燈火のかけなどうら淋しく、寝られぬ夜なれば、臥床に入らんも詮なしとて、小切入れたる疊紙とり出し、何とはなしに針をも取りぬ。いまだ幼くて、伯母なる人に縫物ならひつる頃、衽先、袂の形などむづかしう言はれ、いと恥かしうて、「これ習ひ得ざらん程は」と、家に近き某の社に日參といふ事をなしける、おもへばそれも昔なりけり。教へし人は苔の下になりて、習ひとりし身は大方物わすれしつ。かくたまさかに取出づるにも、指さきこはきやうにて、はかしくしうはえも縫ひがたきを、かの人あらば、如何ばかり言ふがひなく淺ま

樋口一葉

名は夏子。小説家。文章家。明治二十九年、二十五歳

しと思ふらんなど、打返し其の昔の戀しうて、そゞろに袖もぬれそふこゝちす。
遠くより音して歩み來るやうなる雨近き板戸に打ちつくる騒がしさ、いづれも淋しからぬかは。老いたる親の瘦せたる肩もむとて、骨の手に當りたるも、かゝる夜はいとゞ心細さのやるかたなし。

(樋口一葉)

二 雁がね

朝月夜の影空に残りて、見し夢のなごりもまだ現なきやうなるに、雨戸あけさせて打ちながむれば、さと吹く風、竹の葉の露を拂ひて、そゞろ寒けく身にしみ渡る折しも、落來るやうに雁がねの聞えたる、孤つなるは猶さら、列ねし姿もあはれなり。

下谷
東京市下谷區

思ふ人を遠き縣などにやりて、明けくれ便りの待渡らるゝ頃、之を聞きたらば如何なる思やすらむとあはれなり。朝霧夕霧のまぎれに、聲のみもらして過ぎゆくもをかしく、更けたる枕に鐘の音聞えて、月すむ田の面に落つらむ影、思ひやるもあはれ深しや。旅寢の床、佗人の住家、いづくに聞きても、物思ひ添ふる種なるべし。一とせ下谷のほとりに假初の家居して、商人といふ名も恥かしき、唯いさゝかの物とり並べて、朝夕のたづきとなしし頃、檐端の庇あれたれども、月さすたよりとなるにはあらで、向ひの家の二階のはづれを、纒かにもれ出づる影したはしく、大路に立ちて心細く打仰ぐに、秋風高く吹きて、空にはいさゝかの雲もなし。あはれ、かゝる夜よ、歌よむ友の

三つ口
雁々三つ口、
後の雁が先に
なつたら弁と
らしよ 東京
の童話

たれかれ集ひて、靜かに浮世の外の物語など言ひかはしつる
はと、俄かに其のわたり戀しう涙ぐまるゝに、友に別れし雁た
ゞ一つ空に聲して、何處にかゆく。さびしとは世の常命つれ
なくさへ思はれぬ。 擣衣の音に交りて聞えたる、如何ならむ。
三つ口など囃して、小さき子の大路を走れるは、さも淋しき物
のをかしう聞ゆるやと羨ましくなむ。
(樋口一葉)

三 砧の音

近しと聞けば遠し、遠しと聞けば近し。しきるもたゆみ、たゆ
むも又しきる。雁がねの砧をさそふにやあらん、砧の音の雁
がねにかよふにやあらん。あな、あやし、あな、あやし。そもそ
もこの音のかなしきか、住む里のさびしきか、打つをりの憂き

清水濱臣

江戸の國學
者。歌文に長
ず。文政七年
歿、四十九歳

徒然草

吉田兼好の隨
筆を集めたも
の

公世の二位

從二位藤原公
世

ゆゑか。みなあらず、聞く人のこゝろのさびしきなり。
(清水濱臣)

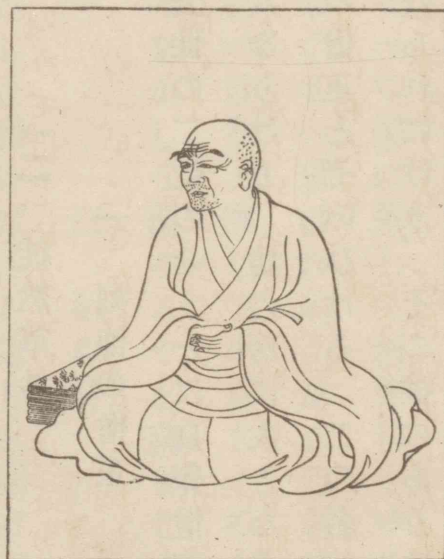
一二 徒然草抄

一 堀池の僧正

公世の二位のせうとに、良覺僧正と聞えしは、極めて腹あしき
人なりけり。坊の傍に大きな榎の木ありければ、人、榎の木
の僧正とぞいひける。この名しかるべからずとて、かの木を
伐られにけり。その根のありければ、切杖の僧正といひけり。
いよく腹立ちて、切杖を掘棄てたりければ、堀池の僧正とぞ
いひける。(第四十五段)

二 入り立たぬ様

何事も入りたゝぬさましたるぞよき。よき人は知りたる事
 とて、さのみ知り顔にやは
 いふ。片田舎より出でた
 る人こそ、よろづの道に心
 得たるよしのさしいらへ
 はすれ。されば世にはづ
 かしきかたもあれど、みづ
 からもいみじと思へるけしきかたくななり。よくわきまへ
 たる道にはかならず口おもく、間はぬかぎりは言はぬこそい
 みじけれ。



吉田兼好

(第七十九段)

三 二つの矢

ある人弓射る事をならふに、もろ矢をたばさみて的に向ふ。
 師のいはく、「初心の人二つの矢をもつことなかれ。後の矢を
 たのみて、はじめの矢になほざりの心あり、毎度たゞ得失な
 く、この一矢にさだむべしとおもへ」といふ。わづかに二つの
 矢、師のまへにて一つをおろかにせんとおもはんや。懈怠の
 心みづから知らずといへども、師これを知る。このいましめ
 萬事にわたるべし。
 道を學する人、夕には朝あらんことをおもひ、朝には夕あらん
 ことをおもひて、かさねてねんごろに修せんことを期す。い
 はんや一刹那のうちにおいて、懈怠の心あることを知らんや。

なんぞ只今の一念において、ただちにすることの甚だ難き。

(第九十二段)

四 高名の木のぼり

高名の木のぼりといひしをのこ、人をおきてて高き木にのぼせて、梢を伐らせしに、いと危く見えし程はいふこともなくて、おるゝ時に、軒だけばかりになりて、あやまちすな、心しておりよ。と言葉をかけ侍りしを、かばかりになりては、飛びおるゝともおりなん。いかにかくいふぞ。と申し侍りしかば、そのことに候。目くるめき、枝危きほどは、おのれが恐れ侍れば申さず。過はやすきところになりて必ず仕ることに候。といふ。あやしき下藤なれども、聖人のいましめにかなへり。(第百九段)

五 鬼神は邪なし

龜山殿建てられんとて、地をひかれけるに、大なるくちなは、數も知らず凝集りたる塚ありけり。「この所の神なり。といひて、事の由を申しければ、いかゞ有るべき。」と勅問ありけるに、「ふるくよりこの地を占めたるものならば、さうなく掘棄てられがたし。」とみな申されけるに、このおとゞ一人、「王土にをらん蟲、皇居を建てられんに何の祟をかなすべき。鬼神は邪なし、咎むべからず。たゞ皆掘棄つべし。」と申されたりければ、塚をくづして、蛇をば大堰川に流してけり。更に祟なかりけり。

(第二百七段)

このおとゞ
藤原實基

大堰川
丹波保津川の
下流、嵐山の
附連を流れる
時の稱

一三 詩二篇

一 わが髪

わが髪はまたもほつるゝ
朝夕に
なほざりならず櫛とれど

あゝ誰か髪うつくしく
一寸ちも
乱さぬことを忘るべき
ほつるゝは髪のがなり

やがてまた
やむにやまれぬわが心

二 雪のたそがれ

落葉した木はYの字を
墨くろくと空に書き
思ひきつたる明星は
黄金の句點を一つ切る
薄く削つた白金の
神経質の粉雪よ
おこりをふるふ電線に

與謝野晶子
與謝野鐵幹氏
の妻。歌人、
文章家

義朝
源爲義の長
子。保元の變、
後白河天皇の
召に應じて白
河殿を陥る。
後、平治の亂
に敗れて殺さ
れた。三十八
歳

船岡
山城國愛宕郡
紫野に在る

ちく／＼さはる粉雪よ

(與謝野晶子—愛・理性及び勇氣)

一四 船岡山

さるほどに、内裏よりすなはち義朝を召され、藏人右少辨資長
朝臣を以て仰せ下されけるは、汝の弟どもの未だ多くあるな
るを、たとひ幼くとも、女子のほかは皆尋ねて失ふべし」となり。
宿所に歸つて、秦野次郎を召してのたまひけるは、「あまりに不
便なれども、勅諭なれば力なし。母かめのとがいだきて、山林
に逃隠れたらむはいかゞせむ。六條堀河の宿所にある當腹
の四人をば、すかし出して、相構へて道の程わびしめずして、船
岡にて失へ」とぞ聞えける。

保元平治の事記物語
源元弘の改題

延景
秦野次郎の名

入道殿
源爲義
御さまをか
へ
保元元年七月
十七日爲義は
比叡山に逃れ
西塔の北黒谷
で出家した
守殿
下野守源義朝
雲林院
山城國愛宕郡
船岡の東紫
野の西

延景難儀の御使かなと心うく思へども、主命なれば力なし。
涙を袖に收めつゝ、泣く／＼輿を昇かせて、かの宿所へぞ赴き
ける。母上は折節物詣の間なり。公達は皆おはしけり。兄
をば乙若とて十三次は龜若とて十一、鶴若は九つ、天王は七つ
なり。此の人々は延景を見つけて、うれしげにこそありけれ。
秦野の次郎、入道殿の御使に參つて候。殿は十七日に、比叡山
にて御さまをかへさせ給ひて、守殿の御もとへ入らせ給ひし
を、世間も未だつゝ、ましとて、北山雲林院と申す處に、忍びてわ
たらせ給ひ候が、公達の御事おほつかなくおぼしめし候間、見
參に入れ奉らむ爲に、具し奉つて參らむとて、御迎にまゐつて
候。と申せば、乙若出でありて、まことにさまかへておはします

守殿の御もとへ
を、世間も未だつゝ

大殿
為義を指す
八郎御曹司
源為朝
四郎左衛門
より九郎
頼賢・頼仲爲
宗・爲成・爲仲

とは聞きたれども、軍の後は未だ御姿を見奉らねば、誰もく
皆こひしくこそ思ひはべれ。とて、我先にと輿に争ひ乗られけ
るこそあはれなれ。これを冥途の使とも知らずして、各輿ど
もに向ひつゝ、急げや急げ。と進みける。羊の歩み近づくを知
らざりけるこそはかなけれ。大宮を上りに、船岡山へぞ行き
たりける。峰より東なる所に輿かきすゑて、如何せましと思
ふところに、七つになる天王走り出でて、父はいづくにましま
すぞ。と問ひたまへば、延景涙を流して、しばしは物をも申さざ
りしが、やゝあつて、今は何をか隠し参らすべき。大殿は守殿
の御承りにて、きのふの曉斬られさせ給ひき。御舍弟たちも、
八郎御曹司の外は、四郎左衛門殿より九郎殿まで五人ながら、

よべ此の表に見え候山もとにて、斬られ奉り候ひぬ。君たち
をも失ひ申すべきにて候。『相構へてすかし出し参らせて、わ
びしめ奉らぬやうに。』と仰せつけられ候間、入道殿の御使とは
申し侍るなり。おぼしめすこと候はば、延景に仰せ置かせ給
ひて、みな念佛候べし。と申せば、四人の人々これを聞き、みな輿
より下り給ふ。

九つになる鶴若殿、下野殿へ使を遣はして、如何に我等をば失
ひ給ふぞ。四人を助け置き給はば、郎等百騎にも勝りなむず
るものを。この由申さばや。とのたまへば、十一になる龜若、ま
ことに今一度人を遣はして、たしかに聞かばや。と申されける
所に、乙若殿生年十三なるが、あな、心うのものどもの言甲斐な

さや。われらが家に生るゝものは、幼けれども心はたけしと申すに、斯く不覺のことをたまふものかな。世のことわりをわきまへ、身の行末をも思ひ給はば、七十になり給ふ父の病氣によつて出家遁世して、たのみて來り給ふをば斬り給ふべき事かは。これをだに斬るほどの不當人の、まして我々を助け給ふことあらじ。あはれ、果敢なき事し給ふ守殿かな。これは清盛が和議にてぞあるらむ。多くの弟を失ひはてて、ただ一人になして後事のついでに亡さむとぞはからふらむを覺らず、只今わが身も失せ給はむこそ悲しけれ。二三年をも過し給はじ。幼かりしかども、乙若が船岡にてよくいひしものをと、汝等も思ひ合せむずるぞとよ。さても下野殿討たれ

給ひて後、忽ちに源氏の世絶えなむことこそ口惜しけれ。とて三人の弟たちにも、な歎き給ひそ、父も討たれ給ひぬ、誰か助けおはしまさむ。兄たちも皆斬られ給ひぬ。情をかけ給ふべき守殿は敵なれば、今は定めて一所懸命の領地もよもあらじ。されば命助かりたりとも、乞食流浪の身となりて、こゝかしこに迷ひ行かば、あれこそ爲義入道の子どもよ。と、人々に指をさされむは、家のためにも恥辱なり。父戀しくば、唯西に向つて『南無阿彌陀佛』と唱へて西方極樂に往生し、父御前とひとつ蓮に生れあひ奉らむと思ふべし。と、おとなしやかにのたまへば、三人の公達各西に向つて手をあはせ、禮拜しけるぞあはれなる。これを見て、五十餘人の兵もみな袖をぞぬらしける。

内記平太
名は政遠

此の公達に、各一人づゝ傳どもつきたりけり。内記平太は天



古版本の挿繪

かせじとおさふる袖のひまよりも、あまる涙の色深く、包むけ

王殿の傳、吉田次郎は龜若、佐野の源八は鶴若、原の後藤次は乙若殿の傳なり。さし寄つて髪結ひあげ、汗拭ひなどしけるが、年頃日頃宮仕へ、朝夕に撫ではだけ奉りて、只今をかぎりと思ひける心どもこそ悲しけれ。されば聲をあげて叫ぶばかりにありけれども、幼き人々を泣

しきもあらはれて、思ひやるさへあはれなり。

乙若、延景に向つて、われこそ先にと思へども、あれらが幼心に
おぢ怖れむも無慙なり。また云ふべきことも侍れば、あれら
をさきに立てばや。とのたまひければ、秦野の次郎太刀を抜い
て後へ廻りければ、傳ども、御目を塞がせたまへ。と申して、みな
のきにけり。即ち三人の首まへにぞ落ちにける。乙若これ
を見給ひて少しも騒がず、いしう仕りつるものかな。われも
さこそ斬られむずらめ。さて、あれはいかに。とのたまへば、ほ
かゝるを持たせて参りたり。手づから此の首どもの血のつき
たるを押拭ひ、髪搔撫で、あはれ無慙の者どもや、かほどに果報
少なく生れけむ。只今死ぬる命より、母御前のきこしめし歎

き給はむ其のことをかねて思ふぞたとしへなき。『乙若は命を惜しみてや、後に斬られける。』と、人いはむくちくちくちのりずらむ。全く其の儀にてはなし。かやうの事をいはむにつけても、又わが斬られむを見むにつけても、泣止りたる幼き者の、また泣かむも心苦しくていはぬなり。母御前のけさ八幡へ詣で給ふに、『我もまゐらむ。』と申せば、『みなまゐらむ。』といへば、『具せば皆こそ具せぬ、具せずば一人も具せじ、かた恨に。』とて、我等が寝たる間に詣でたまひしが、下向にてこそ尋ね給ふらめ。我等かゝるべしとも知らざりしかば、思ふ事をも申し置かず、形見をも參らせず、只入道殿の呼び給ふと聞きつる嬉しさに、急ぎ輿に乗りつるばかりなり。さればこれを形見に奉れ。』とて、弟どもの額髪

八幡
男山石清、水八幡宮、山城國綴喜郡に在る

を切りつゝ、我が髪を具して、もし違ひもやせむずるとて、別々に包み分けて、各その名を書きつけて、秦野の次郎にたじたびにけり。

「又ことばにて申さむずることはよな、けさ御供に參りなば、遂には斬られ候とも、最後の有様をば互に見もし見え參らせ候はむずれども、なか／＼互に心苦しき方も侍らむ。御留守に別れ奉るも、一つの幸にてこそ侍れ。此の十年餘りの間は、かりそめに立ちはなれ參らす事も侍らぬに、最後の時しも御見參に入らねば、さこそ御心にかゝり侍るらめなれども、かつは八幡の御はからひかとおぼしめして、いたくな歎かせおはしまし候ひそ。親子は一世の契と申せども、來世は必ずひと

つ蓮に参りあふやうに御念佛候べし。』とて、いまはこれらが待遠なるらむ、とくく。』とて、三人の死骸の中へわけ入つて西に向ひ、念佛三十遍ばかり申されければ、首は前にぞ落ちにける。四人の傳ども急ぎ走り寄り、首もなき身を抱きつゝ、天に仰ぎ地に伏して、をめき叫ぶもことわりなり。まことに涙と血と相和して流るゝを見る悲みなり。

内記平太は直垂の紐を解きて、天王殿の身を我が肌^{はだ}に當てて申しけるは、此の君を手馴れ奉りしより後は、一日片時も離れ参らすることなし。我が身の年の積る事をば思はず、早く人と成らせ給へかしと、あけくれ思ひてはぐゝみ参らせ、月日の如く仰ぎつるに、只今かゝる目を見る事の心うさよ。常は我

が膝の上^{ひざ}にゐたまひて鬚^{ひげ}を撫^{なで}でて、『いつか人となりて、國をも庄をも設けて知らせむずらむ』とのたまひしものを。うたゝねの寢覺にも、『内記々々』と呼ぶ御聲耳の底に留り、只今の御姿まぼろしにかけろへば、さらに忘るべしともおぼえず。これより歸りて命生きたらば、千年萬年を経べきや。死出の山、三途の河をば、たれかは介錯^{かいさく}申すべき。恐しくおぼしめさむにつけても、まづ我をこそ尋ねたまはめ。生きて思ふも苦しきに、主の御供仕らむ。』といひもはてず、腰の刀を抜くまゝに、腹かき切つてぞ失せにける。

恪勤^{かくきん}の二人ありけるも、幼くおはしまししかども、情深くおはしつるものを、今はたれをか主とたのむべき。』とて、刺違へて二

人ながら死ににけり。「これら六人が志類なし」とぞ申しける。同じく死する道なれども、合戦の庭に出でて、主君と共に討死し、腹を切るは常の習なれども、斯かる例は未だなし」とて、譽めぬ人こそなかりけれ。

此の首ども渡すに及ばず、あまりに父を戀しがりければとて、圓覺寺へ送りて、入道の墓の側にぞ埋みける。(保元物語)

保元物語
保元元年七月
の合戦を主と
し、その前後
の事を敘した
軍記

一五 折々の月

月の興ずべきいと多し。春の曉、花の露おもげなるに、有明の月の細う影を宿せるが、ふと風に吹散らされて消えゆくなど、あはれふかかり。遠山の霞おぼろに暮れかゝる頃、歸り行く

鴈の翅に遮ぎられて、ともすれば見失はんとする三日月の、ほのかなるも心にくし。

夏の夜、遣水に影やどせるは、打見るからにいとすがくしく、月もいかに處得たるらんと、晝の暑さも忘れぬべし。まして其の川、其の池などに、思ふどち棹さしゆくに、月もやがて打乗れる、またなき樂みなり。或は笛とり出し、或は歌りたひ、或は琴かきなでなどして、明くるも知らで波にまかするも、月なくていかでかさあらんとぞ思はるゝ。

秋になりて、空いよ／＼澄みまされば、月の影一しほさやかに、見るまゝに心の塵もをさまるなど、潔からずやは。はしき子どもひき連れて、蟲選といふ事するに、蟬、蟲、機織など聲高う

打ちひゞかす。そこさして行くに、月の宿せる露を命に打ち
はへる、さすがにしばし打守らる。

冬の夜、吹く風さむく、川の水も凍れるばかりなるに、片われ月
のいと淋しう照らせる、あはれなり。街々の燈も消えて、犬の
遠吠のとぎれく〜にきこゆるに、満ちく〜たる月、いと清う照
らせるが、山おろし俄かに吹來て、木枯にやせたる木どもの、さ
まざまに影をうつせる、またなくあはれなるものなり。

池邊義象
國學者。宮内
省御歌所寄人

(池邊義象——模範作文辭典)

延喜

醍醐天皇の年

一六 菅 公

延喜元年二月一日、公、京師を發して太宰府に赴く。従ふ者は

小男と小女と、味酒安行と、名づくる一門生とのみ。その子の
官にある者、處を異にして盡く流竄せられ、その他門下郎等、一
人も心に伴なへる者なし。夫人、女子亦隨行を許されず。た
だ勅使藤原眞興等、衛士若干人を率ゐて護送せるのみ。嗚呼、
昨は臺閣の寵臣、今は邊陲の遷客、何等の轉變、何等の悲惨。住
慣れし紅梅殿を出づる時、平生愛せる庭前の梅花の、未だ春を
迎へざるを見て、悽惻の情に勝へず、一首を詠じて曰く、

こち吹かばにほひおこせよ梅の花

あるじなしとて春をわするな

京を離れて後數日、夫人に送れる歌あり

君がすむ宿のこずゑをゆく〜も

隠るゝまでにかへり見しはや
勅使藤原眞興は攝津に於て公に別れ、右衛門少尉善友、益友、衛士二人を率ゐ、代つて筑紫に赴く。當時の太政官の官符を見れば、公は純然たる囚人にして、任中俸給を賜はることなかりしなり。

道明寺
河内國北河内郡道明寺村

行きくゝて、河内の國土師の里に到り、道明寺に宿る。道明寺は菅家歴代の寺にして、當時菅公の姨覺壽尼あり。蓬萍一たび別るれば、いづれの時を期してか相會するを得ん。公惜別の情を唱うて曰く、

啼けばこそ別れをいそげ鶏が音の

きこえぬ里のあかつきもがな

播磨の國明石の驛に宿れる一夜、驛長公を見て、其の轉變の甚だしきに驚く。公乃ち一聯を作り、自ら慰めて曰く、

驛長莫驚時、變改、一榮一落是春秋

山河邈たり、行くに随つて隔り、風景黯然として、路に在つて移る。長亭短驛幾度か送迎し、二月三月空しく過去りて、公は遂に太宰府の配處に到る。

太宰府の配處は、公によりて絶好の詩境なりき。外に名利の競争なく、内に危殆の憂悶なし。今やしづかに往時を懷慕し、現境を思料し、咏嘆によりて其の哀情を遣るべきなり。天は公に授くるに詩人の天分を以てし、而してまづ公に與ふるに政治家の境遇を以てしたりき。公の政治家たりしや、煩惱内

山河云々
菅家後草に在る句

に公を苦しめ、讒奸、外に公を陥れ、遂に公をして無告の流人たらしめき。然れども悲しいかな、斯くの如くなるにあらざれば、公は遂に詩人たる能はざりしなり。而も公は死に至るまで、此の天分の地に居るを悲しみ、靜かに春秋の榮落を觀じて、何時かは昔日の榮華に歸るあらんことを望みたりき。此の憂愁と希望との現はるゝ所に、

大 宰 府 天 滿 宮



而して公自らは毫も之を

南海の詩
公の讃岐守であつた時の詩

紀長谷雄
文章博士、菅公に學ぶ、延喜十二年薨、六十八歳

知らざりしなり。嗚呼、天道の冷酷無情一に何ぞ是に至るや。太宰府に於ける公の詩は甚だ多からず。然れども一言一句性靈の聲ならざるはなし。文字時に洗煉ならず、思藻必ずしも巧緻ならずと雖も、眞情常に紙面に横溢して、公の面目躍如たるを覺ゆ。これを南海の詩に較ぶれば、意更に摯實、情更に痛切、感極まる所往々人をして卒讀に堪へざらしむ。詩も此に至りては、徒らに技巧のみに非ざるなり。薨ずる時、集めて一卷となし、封緘して紀長谷雄に送る。長谷雄之を見、天を仰いで嘆息せりといふ。今のいはゆる「菅家後草」と稱するものこれなり。今左に其の二三を摘録せん。

自 詠

離家二三月 落涙百千行

萬事皆如夢 時々仰彼蒼

都府樓
都府樓纒看
瓦色、觀音寺
只聽鐘聲
(菅家後草)

これ後草卷頭の詩なり。公が昨今の轉變、眞に一夢にくらぶべし。其の筑紫に在るや、門を杜ちて一步も外に出でず。都府樓は近しと雖も、纒かに瓦色を望み、觀音寺は遠からずと雖も、たゞ鐘聲を聞くのみ。警吏の門を守るにあらざるも、公自ら檢束して遙かに謹慎の意を致せり。秋氣漸く催し、旅雁渡ること頻りなり。憐むべし、公はなほ何時かは京都に還る日あるべきを思量して、一縷の望を繋ぎしなり。旅雁を見て遙かに情を託す、何ぞそれ悽愴たる。

聞旅雁

我爲遷客汝來賓

共是蕭々旅漂身

欹枕思量歸去日

我知何歲汝明春

重陽の佳節は來れり。しかも公は唯ひとり敗屋の下に愁臥するのみ。遙かに去年今夜清涼に侍せしを憶へば、感慨何ぞ勝へんや。有名なる「九月十日」の絶唱は、實に此の感慨を述べたるなり。

去年
醍醐天皇昌泰
三年

去年今夜侍清涼

秋思詩篇獨斷腸

恩賜御衣今在此

捧持毎日拜餘香

罪なくして此の流竄に遇へりと雖も、公は一度も君主の不明を恨み、奸臣の讒構を愠りしことあらず。偏に一身の不遇を嘆じて、天命の否塞を悲しみたるのみなりき。唯その罪なく

して汚名を千歳に遺すは、公の忍ぶあたはざる所なり。故に公の詩や、もすれば此の事に及ぶ。されど斯くの如き境遇にありて、猶君恩を感謝す。亦以て公の性格の甚だ高くして且美なるを見るべきなり。

延喜三年二月二十五日、公は斯くの如き慘澹たる事情の下に病歿せり。時に年五十九。京師を出でしより二箇年餘。其の墓所を安樂寺といふ。越えて二年、公の隨臣味酒安行はじめて神殿を安樂寺に建て、天滿大自在天神と稱せりといふ。斯くの如く太宰府の左遷は、嘗に公をして其の詩人の天分を全うせしめたるのみならず、其の人物の上にも、一層の品位を加へしめたりといふべし。

(高山林次郎——樗牛全集)

安樂寺
太宰府に在る

高山林次郎
文學博士。文學者。明治三十五年歿、三十四歳

一七 忘れ難き日

嗚呼忘れ難き此の日かな。思へばはや五年の昔、春光麗かに南風薫ずる日、友に擁せられて家を辭し故國に別れしは、恰も今日の此の日なりき。帽を振れる客巾を翻せる友、船上艇中、相隔たりては面も定かならず、姿も終には見分かぬまでに消失せぬ。「健在なれ。」「再び早く相見ん。」との、別れの言葉は猶耳に響き、最後の握手今猶掌に感ぜられつゝも、見渡せば、白鷗飛びかふ海の面渺として、埠頭の家屋、故國の山河、已に霞の中に入りనికి。嗚呼、かくて相別れたる我が友、今何處にかある。彼は其の夜、西の方足柄を過ぎて、清見瀉のほとりにさすらひ

我が友
高山樗牛
足柄
神奈川縣足柄上郡の山
清見瀉
靜岡縣庵原郡興津町の南方
海灣

來り、恰も此の海樓に宿りて離別の悶を遣りしなり。月は去り日は逝きて、五年後の今日この日、我は來りて此の海樓にあれど、彼は既に世を謝して、復相見んによしなく、我をして孤影蕭然欄に墮りて、無限の感に沈ましむ。

三月君が西航の首途を横濱に送りたる日、予は西の方函嶺を踰えて駿州に入り、清見瀉の海樓に宿りて、離別の悶を遣りたりき。其の夜月明かに星稀に、一灣の風光恍として夢の如し。中宵欄に倚りて靜かに君を思ひ、うたゝ人生遭逢のはかなきを歎きぬ。

人生遭逢のいともはかなきを歎じたる彼、今や我を此の世に残し、獨り我をして離合の泡沫に似たるを歎かしむ。見渡せ

有渡の山
久能山の別稱
袖師の松原
三保の松原の
一部

彼が墓
櫻牛の墓は、
静岡縣安倍郡
不二見村龍華
寺にある

ば、有渡の山、影かすかにして、袖師の松原、雨にほろなり。彼が埋骨の地、彼が夢遊の山川、總べて暗澹の中に包まれて、海面亦死せるが如し。此の海、此の地、これ彼が久戀懷慕の處なりき。此の夜、此の風光、これ彼が鎖魂の種たりしこと幾たびぞ。山海舊の如く、風光昔の儘にして、彼が友は已に歸り來つれど、彼と其の姿とは、今や尋ぬるに由なし。昨は彼が墓邊の櫻花散掛る寒水石の碑を撫で、今夜五年前の今日の別離を忍んで、彼が遺文に對す。嗚呼、我この流轉の世に處し、此の友なくして、如何にしてか憂懷を遣らん。されど徒らに憂ふるを已めよ、人に百歳の齡なく、世に別離なき人はあらじ。生死は世の常なり。別離は却つて懷慕の樂

みを深からしめ、懷慕は時と處との隔を越えて、神相接せしむ。友此處にあり、悠久の夜亦此處にあり。彼が遺文、餘薰新にして、我が思慕、日夜彼に通ず。清見灣頭今宵雨しめやかにして、夜靜かなり。形は見えねど、彼は我と語り、我は彼に接し、松風・濤聲亦時に款晤に入り來る。嗚呼、平生憂を同じうせる君と予と、先世何の契縁かある。身世匆忙として相移り、際遇已に相異なり、生死、幽明相隔つと雖も、彼と我と長へに相伴なはん。歲月水と流れ去つて、五年の昔を今に返す由なけれども、神相接しては、生死路相隔てず。三世一心の中に融け來つては、彼も我も人相異ならず、靈相同じ。人里には燈火已に影を收め、清見潟の山海亦眠らんとす。雨よ降れ、夜よ暗かれ、有渡山下、

友の墓邊に風靜かなれ。而して我は此處に我が友と相語りつゝ、今宵一夜の眠に入らん。
(姉崎嘲風——停雲集)

姉崎嘲風
名は正治。文學博士。東京帝國大學教授

麻の中の云々
荀子勸學篇にある語

一八 朋友選ぶべし

人は善き友にあはむ事をこひねがふべきなり。「麻の中の蓬は、ためざるにおのづからなほし」といふ喻あり。蓬は枝ざし直からぬ草なり。されども麻におひ交りぬれば、ゆがみ行くべき道のなきまゝに、心ならずうるはしく生ひのぼるなり。心の悪しき人なれども、うるはしくうちある人の中に交りぬれば、さすがかれこれを憚る程に、自ら正しくなるなり。これによりて、善き友にあはむことを經にも説かれ文にもすゝめ

顏氏家訓
隋代の人顔之推の撰

たり。顏氏が家訓には、
與善人居如入芝蘭之室久而自芳也。與惡人居如入鮑魚之肆久而自臭也。

或文
韓非子を指す

九條殿
藤原師輔

董齋云々
孔子家語に在る語
芝澗に住みし四人
漢の商山の四皓・東園公・夏黄公・用里先生・綺里季

と云へり。また或文には、人の心は水の入物にしたがふが如し。入物細ければ即ち細くなり、入物圓ければ即ち圓くなる。こゝろは朋友にならふ、何ぞ擇ばざるべけむ。と書けり。又九條殿の遺誡には、高聲惡狂の人に伴なふことなかれ。と教へ給へり。かゝれば果敢なくうちかたらはむ友なりとも、よく其の人を擇ぶべし。「董齋器を異にすべし」となり。ゆめく心あしからむ人に伴なふべからず。花の下に春ばかりを契り、月の前に一夜を限る友までも、情あるたぐひは、忘れがたく思

竹休に籠りし七賢
五五頁の註にある

子猷は云々
王子猷は東晉の人、安道は其の友、戴逵の字。晉書にある

劉惔は云々
劉惔は東晉の人、玄度は其の友、許恂の字。晉書にある

鄒枚
鄒陽、枚乘、ともに梁の孝王の臣

兎園
孝王の園の名

魯の仲尼

孔子

孟母
孟子之母

伯牙鍾子期
共に周代の人

ひ出でらるゝものなり。すべて友をかたらふには、隔つる心なきを徳とす。芝澗に住みし四人の翁、竹林に籠りし七賢の類、さこそおもはしき友なりけむ。子猷は、雪の夜、月にあくがれて、遙かに剡縣の安道を尋ね、劉惔は清風朗月に、玄度のなきことを恨みけり。まことに友のなからむには、如何なる興宴も物うくおぼえぬべし。さればこそ梁の孝王は、鄒枚と聞えし二人の臣、さりしかば、兎園の遊をも停め給ひ、魯の仲尼は、子路といひし思はしき弟子におくれて後は、人のすゝめけるしゝびしほをも捨て給ひけり。孟母が子を思ふ故に、居を三度までかへけるも、友を選ぶ意なり。伯牙・鍾子期といふは、琴の友なり。鍾子期先だちて失せにけ

定家

藤原氏の俊成の子。歌人。新撰集の撰者。

は、萬葉集の、

佐野のわたりのゆきの夕暮

定家

萬葉集

二十卷。大伴家持の撰といはれてゐる。長奥麿の歌

苦しくも降りくる雨かみわの崎

さぬのわたりに家もあらなくに

によれるもの、之を本歌とれる歌の本と稱す。

眺むれば千々に物おもふ月にまた

わが身ひとつの峯のまつ風

長明

長明

鴨氏の歌人、方丈記の著者

は、古今集の、

月見れば千々にものこそ悲しけれ

わが身一つの秋にはあらねど 千里

千里
大江氏。延喜頃の人

の敷衍なり。

かく古辭を尊んで、想は清新ならんことを期せり。然り、或點に於ては清新なる所もあるべし。されど大體に於て、陳腐にして蹈襲の弊を免れず。根本の思想において、殆ど新に添加する所なし。かくいへば、辭想共に昔を追うて、保守・因循何の取るべきなきが如しといへども、新古今集の特長は、前代をうけて練磨に練磨を重ね、能く舊想に新衣を着せて、清新なる體をなさしめしにあり。即ち難辭奇語を用ひざれども、能く語を練りて、言ひまはしの巧になれることこれなり。

さそはれぬ人のためとや残りけむ

良經
藤原氏。歌人

明日よりさきのはなの白雪
良經
されど言ひまはし過ぎて、自ら意義の晦澁に陥れるものなきにあらず。

知られじな同じ袖にはかよふとも

たがゆふぐれとたのむ秋風
家隆

語辭の彫琢また至れり盡せり。

たつた山夜半にあらしの松ふけば

雲にはうときみねの月かけ
通光

修辭の法には、色なきものに色をつけ、形なきものに形をあたへて、

ほとゝぎす深き峯より出でにけり

家隆
藤原氏。歌人、
新古今集撰者

通光
姓は源。後深
草天皇の時の
太政大臣

外山のすそに聲のおちくる
西行

など色々あれど、擬人の法を多しとす。

野原よりつゆのゆかりを訪ね来て

我がころもでに秋風ぞふく
後鳥羽院

後鳥羽院
第八十二代の
天皇

斯くして語辭の修練は、自ら簡単に詞をつゞめて、てには動詞等の省略を來し、従うてまた名詞を多くするに至りぬ。

みよし野のたかねの櫻散りにけり

嵐もしろきはるのあけぼの
後鳥羽院

同時にまた漢詩などの調も加はりて、自ら切字多き歌加はりぬ。

山かげやさらでは庭にあともなし

有家
藤原重家の子

春ぞ來にける雪のむらぎえ 有家

さて思想の上より觀れば、先蹤を追うて、叙景のもの少なからず。殊に湖海の夕、また月などの詠多し。

なごの浦の霞のまよりながむれば

入日_二をあらふ沖つしらなみ 實定

しかれども大部分は依然として叙情にあること、和歌本來の通性にして、ひとり此の時代のみ然らざるを得ざるなり。ただ此の集に於て、特に説くべきものありとせば、情景の融合にあり。これ前代に未だ見ざる所なり。

忘れじの言の葉いかになりにけむ

たのめしくれば秋風ぞ吹く 宜秋門院

實定
藤原氏。後徳
大寺、歌人

宜秋門院
源藏人頼行の
女

これや見し昔すみけむあとならむ

よもぎが露に月のかゝれる 西行

(藤岡作太郎)

二〇 千遍讀

舊歲御狀相達し、御返書未だ仕らず候うち、新歳の芳翰又々相達し、忝く拜見仕り候。彌、御壯固に御重歲なされ候よし、欣慰この御事と存じ奉り候。此許相變らず、私儀無爲に罷在候。兩度共に御佳作御見せ下され、偕々御上京以後、別れし御精出され候御事に御座候や、格別に御上達なされ候様に存じ奉り、珍重之に過ぎず候。詩は、做多看多商量多と申候。とかく多

筆蹟

夜の紅葉
古里の人に見
せばやもみじ
葉の月にうつ
らふ夜のにし
きを
逃 懐
とやかくとお
もひしことも
くれたけの世
のありさまの
かたくもある
かな
雨森東

く御作りなされ、上手に御なりなさるべく候。商量の字、まづは人と相談することを申候へども、人と相談いたすばかりにては無之、心を以て心に問ひ、我が心にて思案する事をも商量

夜の紅葉

古里の人に見せばやもみじ
葉の月にうつらふ夜のにしきを
逃 懐
とやかくとおもひしことも
くれたけの世のありさまの
かたくもあるかな

雨森東

雨森芳洲筆蹟

と申候。俗話にも、人の申す事を承り、思案致し御返事申すべく候。と申候時は、待、我、商量、回話、と申候。和韻致し進じ申

候様に仰せ下され候。此許御逗留中は、一時の御挨拶と存じ、悪詩も作り申候へども、上方までは恥しく御座候て、のぼせがたく御座候。それ故和韻をば仕り申さず候、御宥恕下さるべ

候。こゝに一つをかしき話御座候故、書きつけ御目につけ候、御笑ひ下さるべく候。

繁右衛門
性は古川、名
は方久。對馬
の國老

去年より、繁右衛門杯皆々寄合ひ、歌の會を致し、間々私その座へ参り候事も候へば、私にも、是非歌をよみ候へ。と申候へども、詩は平仄なりと習ひ覺え居り候へど、歌は遂に百人一首の講釋をも承りたる事も御座なく、かなけりらむ、一つも埒は明き申さず候。其の上、歌詞としては尙々存じ申さず候につき、古今千遍讀と申す願を心に立て申候て、最早百五十遍は昨日までに讀みおほせ申候。今までの積りに致し候へば、八十四の七月に、千遍の數満ち申候積りに御座候。其の間に老耄致し候か、又は閻羅王より勾死鬼など遣はし申され候はば、仕るべき

雨森芳洲
名は俊良、通稱東五郎、京都の儒者で對馬藩の儒臣となつた。寛政八年歿、八十八歳

様も無之候へども、まづは願を満し候心に御座候。右千遍讀み候て、さて歌をよみかゝり候心に御座候。是は壽命の事はわきにのけ置きての分別に御座候へば、さりとはをかしき事に御座候。併し私最早世間に望ある者にもなく候へば、斯く致し死を待ち候も、一奇事と存じ立ち候事に御座候。此の段書きつけ御目につけ候は、老人だにかく候事に御座候故、皆様にも御年少に御座なされ候へば、尙々徒らに御暮しなされざるやう申上げたたく、此の如くに御座候。同志の御面々へ、御參會の節、此の旨御傳へなされ下さるべく頼み奉り候。申したき事も御座候へども、老筆堪へ難く、早々貴答に及び候。餘は後音を期し候。恐々謹言。

(雨森芳洲)

二一 ヴェニスの法庭 その一

登場人物

公爵 (ヴェニス市の長)

アントニオ (ヴェニスの商人)

バッサニオ (アントニオの親友)

グレシヤノ (ヴェニスの紳士。前記二人の友)

シャイロック (富有な猶太人)

ポオシヤ (バッサニオの妻。若い法學博士を裝うて、この裁判をする)

ネリッサ (ポオシヤの侍女。グレシヤノの妻。法學博士に扮装したポオシヤの書記となつて法庭に出る)

公爵 アントニオとシャイロック。兩人とも前へ出い。

ポオシ シャイロックといふのは、其の方か。

シャイ シャイロックは手前でございます。

ポオシ 其の方の今度の訴訟は奇怪な訟ぢや。併し手續には何の不都合もないから、ヴェニス法律の表としては其の方を非難することは出来ん。……(アントニオに其の方の生死は原告に一任せねばならんのか。

アント はい、さやうに申しをります。

ポオシ 證書に對して異議はないか。

アント ございません。

ポオシ では猶人が慈悲を施さなければならん。

シャイ ならんとおつしやるのは、どういふ據ない理由がござ

いますか。

ポオシ 慈悲は據なく施すべきものではない。慈悲は春の小雨の自らにして地を潤すが如くに降るものぢや。其の徳澤は二重である。慈悲は、之を與ふる者に取つても幸福なれば、受ける者に取つても幸福なのぢや。慈悲は最も大いなる人に在つて、更に最も大いなる美德となる。此の美德が君主の胸に在れば、其の光は金の冠にも幾倍する。彼が國王が手に持たせらるゝ笏は、ほんの俗界に於ける威力や尊嚴の標章たるに過ぎないが、慈悲は目に見えぬ心の中に宿る寶で、永世不滅の神の徳ぢや。随つて、慈悲を以て正義を和ぐるに及んで政道が始めて天道に合ふのである人間

の力が其の時はじめて神の力に似るのである。だから猶人よ、お前は頻に正義といふことを主張するが、正義ばかりで以て裁判したなら、吾々どもの中、只の一人として救を得るものはあるまい。お互に且暮神に慈悲を祈る、其の心を推及ぼして他人に慈悲を施すのが人情といふものぢや。かやうに言葉を費すは、其の方の、正義一邊の申立を宥めようが爲である。それをお前が強ひて申張れば、ヴェニスヴェニスの厳格な法庭は、據なくそこにゐる商人に宣告を下さなければならん。

手前が非分なれば、命をお取り下さい。手前は正義を要求します。證書通りの科料を要求いたします。

商人は金をえ拂はんのか。

いや、金は、わたくしが彼に代つて支拂ひます、元金の三倍にいたしました。若しそれで足りませねば十倍にもして支拂ひます、わたくしの手なり、首なり、心の臓なり、抵當にいたしました。それでも足らぬと申すやうであります。れば、正義呼はりは表向で、底意は害心に相違ございません。願はくば政府の御權力を以て、大義の爲に、聊か法律を曲げられまして、此の人非人を御制肘下されたい。

いや、それは出来ん。ヴェニス中の如何なる權力を以てするも、定まつたる國家の法令を改めることは出来ん。一度例を作ると、それが原で、種々の間違が續出して、長く國

ダニエル
舊約全書中に
記される豫言
者。西紀前六
百年頃の人と
傳へられる。
ジュデヤ王の
親族で、エル
サレムに生れ
た。

家のわづらひとなるからさういふことは出来ん。

シャイ　ダニエル様の再来だ。全くのダニエル様だ。若いには似合はん恐れ入つた賢明な裁判官さんだ。

ボオシ　どうか其の證書を見せてくれ。

シャイ　はい、これにございます、憚ながらこれにございませす。

ボオシ　シャイロック、此の金額を三倍にして返済しようと思して居るぞ。

シャイ　誓言、誓言、手前は天帝に誓言しました。我がたましひに虚誓言の罪が負はされませうか。いゝや、それは、ヴェニス一國に代へても出来ません。

ボオシ　さて、此の證書は、已に期限が切れてをるから、猶人は之によつて正當にその商人の胸元から肉一ポンドを切取る権利がある。慈悲をかけてやれ。三倍の金を取つて、此の證書は予に裂かしてくれ。

シャイ　證書面通りの支拂さへ済みますればね。貴方はお立派な裁判官さんでおあんなさるらしい。法律をよく知つてお出でなさるし、解釋の仕方もしつかりしたもんだ。わしは貴方を立派な國家の柱石だと思ひますから、其の法律を盾に、わしは貴方に言ひます、ずん／＼裁判をなさい。魂をかけて誓言します、人間の舌の力では、わしの心を變へさせることは出来ません。是非證書通りに願ひます。

アント わたしも切に願ひまする、どうか御裁判下されますやうに。

二二 ヴェニスの法庭 その二

ポオシ では是非に及ばん。其の方の胸へ彼が刃物を受ける準備をせい。

シャイ お、公明正大な裁判官。若いに似あはん偉い人だ。

ポオシ 蓋し此の證書面に認めてある料金は、法律の意義並びに目的上より見て、十分是認せらるべき性質のものである。

シャイ 全く其の通り。お、賢明な、公平な裁判官。まあ、お前さんは、見かけよりは、ずつと、老成な偉いお方だ。

ポオシ それゆゑ、胸元を開け。

シャイ はい、胸でございます。さう證書に書いてあります。でございませう。「すぐ胸元より」と書いてございませう。

ポオシ さやう。肉の重さを量るはかりはあるか。

シャイ 準備してをります。

ポオシ シャイロック、其の方自辨で外科醫者を呼寄せておけ。傷口をとめんと、出血の爲に命を失ふかも知れんから。

シャイ そんなことが證書に書いてございませうか。

ポオシ 書いてはないが、その位の情は、かけるのが當然ぢや。

シャイ 見附かりませせん。證書に見えませせん。

ポオシ 商人、何か申し残すことがあるか。

アント たゞ聊か。覺悟はとうに致してをります。バッサニ
オさん、お手を。御機嫌よろしう。わたしが貴方の爲に斯
ういふ事になつたからといつて、歎いて下さるな。運命の
神が、わたしに對しては、まだしも親切にしてくれます。不
幸な人間を零落させて財産に離れさせながら、一思ひに死
なせもしないで、額に皺を湛へた凹んだ目で、吾と我が貧窮
を眺め暮させるのが例であるのに、そのみじめさだけはま
ぬがれさせてくれます。どうぞ奥さんへよろしく。アン
トニオはどうして死んだか、どんなに貴方を愛してゐたか、
有體に懇ろにお話しなすつて、奥さんに判斷して貰つて下
さい。曾てバッサニオさんに一人の親友があつたと言へ
るかどうかを。貴方が親友を失つたと悔んで下されば、わ
たしは貴方の爲に負債を拂ふのを決して悔みません、其の
證據には、猶人がずつと深く切れれば、笑を含みてわたしは眞
に全心を傾けて拂ふのです。

バッサ
アントニオ、わたしは今現に生命其のもの程に大切な
妻を娶つてゐる。けれども、生命其のものも、その妻も、全世
界も、わたしに取つては、お前さんの命以上に貴いものでは
ない。わたしは何もかも棄てゝしまふ、みんな犠牲にして
かまはないから、どうかしてお前さんを此の悪魔から救ひ
たいのです。

ポオシ (獨語のやうに) 若し細君が傍にゐて、さういふことを

お前さんが言ふのを聞いてゐたら、餘り有難がりもすまいね。

グレシ わたしにも妻があつて、それを非常に愛してゐるんだが、いつそ死んで天國にゐたら、言傳をして神様に直訴して、此の狼のやうな猶人の心を入替させて貰ふものをなあ、ネリッサ（獨語のやうに）さういふことは、細君に聞えない處で言はないと、家庭に風波が起りますよ。

シャイ 基督教信者の男どもは皆あれだ。おれにも一人娘がある。基督教信者を夫に持たす位なら、強盜の血統の者に連添はせた方がましだ。……時間が費えます。どうか御宣告を願ひます。

ポオシ そこにゐる商人の肉一ポンドは其の方の物である。法庭が之を認めて、法律が之を其の方に與へる。

シャイ 公明正大な裁判官。
ポオシ すなはち其の方みづから手を下して、彼が胸元から其の肉を切取らねばならんぞ。法律は之を許可し、法庭は之を是認する。

シャイ 最も博學なる裁判官……宣告だ。覺悟しろ。

ポオシ ちよつと待て。まだ申すことがある。此の證書には、血は只の一滴たりとも其の方に與へると書いてない。明瞭に「肉一ポンド」とのみ記してある。然る上は、證書面通り肉一ポンドを取れ。併しながら若し之を切取るに當つて、

基督信者の鮮血を只一滴でも灑ぐに於いては、其の方の地所も家財も、ヴェニス²の國法によつて、悉く之をヴェニスの國庫に沒收いたすぞ。

グレシ お、公明正大な裁判官。 どうだ、猶人。 お、博學なる裁判官。

シャイ それが法律でございますか。

ボオシ 自身の目で其の條文を見るがよろしい。 畢竟其の方がひとへに嚴重な證書面通りの裁判を申し乞ふが故に、おのれが望み以上の、嚴重な裁判を受けなければならんのだやと覺悟をせい。

グレシ お、博學なる裁判官。 どうだ、猶人。 成程博學なる裁

判官さんだ。

シャイ では彼の申出通りにします。 證書を三倍にして拂へば、あの基督信者を許してやります。

バッシ その金はこゝにある。

ボウシ 待て…猶人はあくまでも法律の明文通りの裁判を要求してゐるのである。 待て。 急ぐに及ばん。 猶人は科料以外何物をも受取るべきでない。

二三 ヴェニスの法庭 その三

グレシ お、猶人。 公明正大な裁判官、成程博學な裁判官。

ボオシ であるから、肉を切りとる準備をせい。 血を流しては

ならんぞ、また肉は丁度一ポンドより以外、多くも少くも切取ることはならんぞ。若し聊かでも、丁度一ポンド以上又は以下を切取るに於ては、よしそれが、たかが一分又は一厘ほどの輕重であるとしても、いや、只髮の毛一筋だけの量目の差を秤皿の上に生ずるに於ては、其の方の命は無いぞ、其の方の財産は悉く國庫に沒收いたすぞ。

グレシ 今ダニエルさんだ、成程、ダニエルさんだ。どうだ、罰當り、降參したらう。

ボウシ なぜ猶人は躊躇してゐる。科料を取れ。

シャイ 元金だけを受取つて歸らせて貰ひたい。

パツサ とうから渡さうとしてゐるのぢや。こゝにある。

ボオシ いや、彼は公の法庭に於てそれを受取らんと申したのである。彼は只法律通り、證書通りの科料の外を受取ることは相成らん。

グレシ いや、以てダニエルさんだ、今ダニエルさんだ。お猶人、好い言葉を教へてくれて有難う。

シャイ 元金だけでも受取れませんか。

ボオシ 其の方が受取るものといつては、命がけて切取るべき科料の外にない。

シャイ では、うぬ、どうとも勝手にしやあがれ。もう論判は無駄なこつた。

ボオシ 待て、猶人。其の方にはまだ法庭の御用がある。ヴェ

ニス市の法律によると、外國人が、直接若しくは間接の方法を以て當ヴェニス市民を殺さうとした場合に、それが露見に及べば、其の財産を二分して、被害者たらんとせし者は其の一半を取り、他の一半は國庫に沒收する規定である。さうして其の犯罪者たる者の一命は、ひとへに公爵の御仁恕に任せ、何者もこれに對して異議を申し立てることの出來んことになつてゐる。其の方の罪狀は正にそれに相當する。直接又間接にそれにある商人の命を奪はんと企てたことが明瞭であるから、只今申し聞かせた罪科はまぬかれんぞ。であるから、速かに土下座して公爵の御慈悲をお願ひ申せ。

グレンシ 自分で首を縊つて死ぬ御許可でも願ふがいゝ。併し財産は悉く沒收されてしまふのだから、繩を買ふだけの餘裕もないだらう。だから政府の費用で以て首を縊めて貰はんければなるまい。

公爵 吾々の精神の其の方と異なることを知らせるために、願を聽くまでもなく、其の方の一命は赦してやる。さて財産は、一半はアントニオに取らせ、他の一半は國庫に收める。但し全く悔悟すれば、或は科料だけで差許すかも知れん。

ボオシ さやう、アントニオの分は格別として、國庫へお收めの分はさやういたしてもよろしう御座います。

シャイ いゝや、命も何もかも取つて下さい。赦して貰ふには

及ばん。家を支へてゐる大柱を取られるのは家を取られるのだ。生活の資本を取られるのは命を取られるのだ。

ボオシ アントニオ、其の方は彼に對して何等かの慈悲を掛け
てつかはす氣か。

グレン 無料で首縊る繩を一筋。其の他に何がやれるものか、
あの罰當りに。

アント 憚ながら公爵閣下をはじめ御列席の方々へ、猶人が財産の一半は料料でお赦しになりますやう願ひます。残る一半は若し當分の間手前に預け置き下さりますれば、満足にございます。右は猶人の死後に至りまして、彼の娘夫婦に引渡すことにいたします。尙別に二ヶ條の願ひが

ございます。すなはち此の御仁恵に對して、彼が速かに基督信者に相成るといふこと、次に、死後一切の財産を娘夫婦に譲るといふ證書を此の法庭に於て認めまするやう、お言ひつけ願ひたう御座います。

公爵 その通り申附けよう。もし否むに於ては、只今言ひ渡した赦免をも取消す。

ボオシ 猶人、よろしいか。どうぢやな。

シャイ よろしう御座います。

ボオシ 書記役、財産譲り渡しの證書を。

シャイ どうかお暇を下さいます。病氣にございます。證書は後からお送り下さい。宅で記名いたします。

公爵 歸つてもよろしい。が命令通りにいたせ。
 グレシ おい洗禮を受けるには立合人が二人要るぞ。だが、若
 しおれが裁判官であつたら立合人をもう十人ふやして、貴
 様を洗禮盤よりも絞罪臺へつれていつたものをなあ。
 (シャイロック入る。)

(坪内逍遙譯——ヴェニスの商人)

坪内逍遙

名は維蔵。文學博士。英文學者。脚本、小説等の創作及び多くの翻譯がある。特に英國の戯曲家シェクスピアの劇詩を譯したものは名高い。

二四 曠乃誕生

東の空のほのぼのと

汝が身はらみそあまろり

ふれ暁のほもさつらて

けぞるるはつらまはらん

くまよちやけき紅の

ひるるをねつめ星や

やがて乙女となるまでの

汝が生ひはきこのしんせよ

朝風舞はれまわると

遠くをゆく神を吹ま

語り眼をらよ驚かす

まづ黎明を呼びにきり

始て朝の扉の上に

汝が初鮮を聞く時を

暮を破るにけほの

暮を破るにけほの

わが朝の扉にゆきあきて

朝日に白くはなれど

まづ飛もなき姿に

たづねる夢のぬきぬき

ひかよつてはなれど

思ふに涙もなれど

そはらばしき眼も

まにまに見んとおぼし

まづ生れ来し世に

おぼしき世に

まづ生れ来し世に

なほもろか早も慕あらん

行くすゝも心と生まらる

いふもれもあつた重なり

かゝるゆたなき船のま

心のまがーづるま

(島崎藤村—藤村詩集)

島崎藤村
名は春樹。新
體詩人、小説
家

二五 カルナバル祭

カルナバル祭は巴里年中行事の一番の見物である。色紙を

小さく丸く打抜いてカルナバル祭に投合ふものを、佛蘭西ではコンフェッチと呼ぶ。カルナバル祭には小商人が袋に入れて大道で賣つて居る。それが凄じく賣れる。男も女もそれを抱へて出る。子供は子供同志、大人は大人同志、皆無邪氣にそれを投合ふ。この日一日は、人も犬も馬車もオートモビルも大道も家の中も、何から何までみなコンフェッチだらけになる。

私は晝飯を済すと、直にリポリ街に出かけて、テユイルリー公園とこの町との仕切の鐵柵の高い石垣の上に腰かけて待構へた。公園の鐵柵はコンコルドからルーヴル博物館まで七八町は續いてゐるだらう。それが皆、二時間でも三時間でも

リポリ街
パリ市中、テ
ユイルリー公
園の北東に沿
ふ通
テユイルリ
ー公園
リポリ街とセ
イヌ河とに挟
まれてゐる大
公園

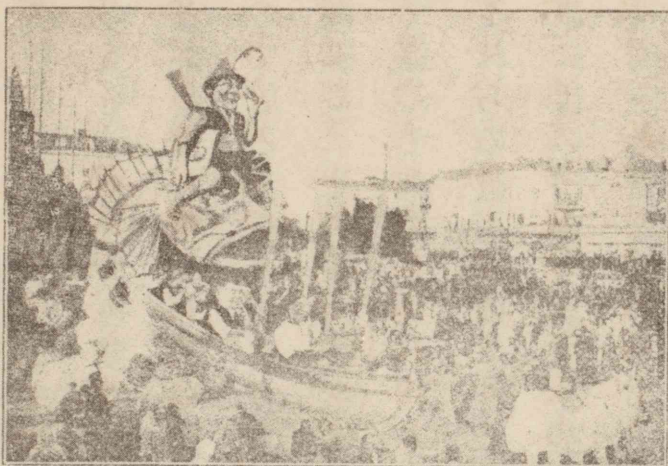
コンコルド
場
パリ市中の廣
ルイブル博
物館
テイルリ
公園の東南に
ある

ジャンダ
ク
オルレアン
少女。西紀千
四百二十年
英軍の手から
佛國を救ひ出
きたとされた愛
國者

待たうといふ我が黨の男女に占領されて隙間がない。暫くすると見物がどよめき出した。喇叭の音が幽かに聞えてくる。行列がルーヴルの前まで来たといふ聲が起る。石垣に腰をかけてゐた連中は皆鐵柵につかまつて立上る。樂の音が耳をつんざくやうに聞え出した。先登は、日を受けて金色に光り輝くジャンダルクの記念像の前を過ぎて、いよいよ私たちの前に現れ出した。私が今見物しようとする行列は、三十の山車、二十の花馬車、二千五百人の樂隊、三千人の假裝者、二百人の騎馬の男女等より成立つので、その目覺しさ、華やかさ、實に想像に餘るものである。中世の騎士の面影を偲ぶ甲の後に長い毛を下げた市の

ズーアブ兵
阿弗利加の北
部の兵隊。赤
いトルコ帽を
つけ、赤いた
つくりの如き
ゆつぱりを着
ては、いづ
く

クツク・ペ
アリ
共に米國人。
北極探検者



カナルパル祭の山車

衛兵三十名が騎馬で先を拂ふ後に續いて、四十のズーアブ兵士が太鼓、笛で賑かに囃し立てながら練つて来る。第一に現れた山車はおほきな流行帽子を女製造者が寄つてたかつて製へて居るところだ。日本ならば、向ふ鉢巻に勇みの姿で、人間が陽氣に引くところだが、こゝでは四頭の逞しい馬が悠々と引いて行く。つゞいて現れたのが北極探検。中央の北極が廻舞臺のやうに回轉し、クツ

エスキモー
北米グリーン
ランドなどの
寒帯地方に住
む一民族

クとペアリーが互に後からピストルで狙合つて居る。北極の中心には、北極星を現したをとめが不滅の雪を象つた純白の衣を着て立ち、周囲の廻らぬ部分には、エスキモーや白熊などが配置してあり、その間に、ペンギン鳥に假装した人間が踊つて居る。その次に、夜と題した山車が来る。次には、飛行機が来る。その間に、多勢の假装者が樂隊に合せて、舞蹈の足取で進んで来る。

これらの行列の間々を、意匠をこらした花馬車が彩る。花馬車には、いづれも女王と侍女とが乗つて居る。これらの女王は、國內の重なる町々の市場から選出された女で、女王の中の女王は、その女王等の中から選抜されたものである。女王の

中の女王は、女王の中の女王の山車といふ特別のものに乗る。これが今日の行列の花である。

今年の女王の中の女王の山車は、希臘神話にある羽の生えた金色の天馬が、空間の征服の爲に「青春」を導いて空中を奔るといふ意匠に成つたもの、女王は青春の象徴で、二十世紀の文明は空間を征服するにあることを表したものであつた。

女王の花馬車の過ぐる處、人は女王を目がけてコンフェツチを投げかける。花馬車の中の花に埋るゝ人も、やがてはコンフェツチの中に埋るゝかと思はるゝばかり。あゝ、興ある風情ではある。中にも、私が忘れ得ぬまで瞬間の美に打たれたのは、女王の中の女王の山車の行過ぐる時、向側に立並ぶ家の

